求道

第四卷
第四號

（毎月一回發行）　明治四十年十七月二十五日發行　　明治三十一年十二月二十六日　第三種郵便物認可

求道第四卷第四號目次

◎信は生命也　求道　感謝
◎聖人の一代◎慈父釋尊◎攝取不捨の事　講話　近角常觀
◎自然法爾法語　近角常觀
◎憶念　近角常觀
◎遂に他力に入る　告白　岩井三子
◎娑羅双樹《短歌》　歎咏　左千夫
◎夕の感《長詩》　增田甚
◎さみだれの頃《短歌》　巖眞
◎甲州行《短歌》　志都兒
◎九州傳道日記　旭村生
◎求道學舍第一第二求道會講話題◎夏期傳道日割

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
（本郷森川町一番地）

毎土曜午後二時
第二求道會
（九段坂佛教倶樂部）

毎月二日午後七時
第三求道會
《日本橋綱町説教所》

夏期中休講
（九月第二土曜開講）

求道　第四卷　第四號

信は生命也

信なき生活は無意義の生活なり、人生信ありて初めて眞の意義を生し來る也、信なき人生は醉生夢死の人生也、吾人生れて初めて如來大悲の慈愛を信じ奉るを得る、是れ信仰ある人生なり生命ある人生也。

信なき道德は律法の道德なり、律法の道德は形式の道德なり、虛飾の道德也、僞善の道德也、信せずして行ふものは名の爲めにするもの也、利の爲にするものなり、外聞の爲にするもの也、世間の爲にするもの也、少くとも道德の爲めにする道德也、信ある道德は之に異り、爲さゞるべからざるが故に之を爲し、行はずして止むべからざるが故に之を行ふ、之を爲さしむる力あり、之を行はしむる生命あり、其力とは何ぞや、生命とは何ぞや、曰く如來の本願力也、如來大悲の救濟也。

人生一切の力と行とは吾人初めて如來の大悲を認めたるの時に起り來る、人生如來に遇はずんは何を以て生命を來さん、顧みれば吾人人生に處する無始已來茫々として右に往き左に迷ひ遂に津梁のよるべきなし、嘻々として笑ふものは人生夢幻の快樂に醉へるなり、昏々として憂ふるは人生苦惱の衢に彷へるなり、彼の勞あるもの眞の勞にあらず、やがて衰ふべき虛勞なり、彼の悲めるもの人生の眞相を達觀せるにあらず、其欲する所に達せざれば也、彼の眞面目なるもの眞の眞面目にあらず、自ら他の人間已上になり得べきが如く理想すれば也、高く理想を仰望するの人は是眞個の理想にあらず、遂に自己を高擧し、他人を藐視するの空想たるべければ也、嗚呼久遠劫來、十方の衆生何ぞ惑へることの太甚しきや、我等凡愚善と思へること惡と思へること、皆是れ自己を標準とせる迷想たらざるはなし、此の如き無始已來の無明の長夜何ぞ夫れ久しきや。

幸に大慈大悲の如來在して吾人此の如き無明の生活を矜哀したまふ、我等人生に於てあらむかぎりの邊際に達したるとき初めて此大悲の光明の遇ひたてまつりて如來本願の慈心を味ひたてまつる、此に於て孤獨の人生初めて慈親の膝下に歸る、無始已來流轉の凡愚初めて攝取の慈懷に入りたるの時、

我等如何に久しく如來の招喚に背きしかを悟る、嗚呼如來は我等がために思惟したまへり、如來は我等がために修行したまへり、五劫思惟の本願兆載永劫の修行、如何に久しく我等が爲に苦勞したまひしかを知れり、此に初めて十劫已來我等を待受けたまひし大悲の願心を知り奉る、嗚呼我等無明長夜の夢醒めたるの時初めて五劫永劫十劫の慈悲を感じ、此慈悲の光明吾人が胸中に達したる時曠劫多生無明海中に迷ひたりしを悟る、かくの如く吾人如來の慈悲に接觸したるの時人生初めて光明あり、人生初めて生命あり、人生初めて自覺あり人生初めて平和あり、人生初めて無上の意義ありと謂つべし、是人生が初めて迷妄の境を解脱して醒覺の光明界に入れるもの、此に於てや信仰ある人生を持來し、生命ある人生を實現す。

かくの如く一たび如來の慈愛を信じ奉りて道德初めて眞の道德となる、何んとなれば如來の不可思議力を信じ奉りて人間初めて罪惡の凡愚たるを悟り、亦無限大悲の救濟あることを知る、罪惡の凡愚たるを知りて初めて中心の懺悔あり、大悲の救濟を感じて此に無限の感謝を生ず、此の如きの懺悔と此の如きの感謝との生活は是即ち知らず識らず帝の則に從ふもの、眞正なる道德の生活也、經に曰く其有聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一念當知此人爲得大利則是具足無上功德といふもの、即ち是れ人生無限の價値を生じ、無上の功德を生じ來るもの即ち、信仰ある生活の至極也。

聖人此經の則の文字を釋するに法則を以てし、法則を解するに如來不可思議本願の自然の力を以てし給ふ、是れ律法自力の法則を排して他力信仰の眞宗を開闡したまひしもの、吾人は之を拜讀したてまつる毎に聖人か如何に如來大悲の恩籠の下に知らず識らずの間に自然法爾に帝の則に從ひたまひしかを渴仰せずんばあらざる也、曰く、

則といふはすなはちといふ、のりとまふすことはなり、如來の本願を信じて一念するに、かならず、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに廣大の利益をうるなり、自然にさま〳〵のさとりをひらく法則なり、法則といふは、はじめて行者のはからひにあらず、もとより不可思議の利益にあつかること自然のありさまとまうすことをしらしむるを法則とはいふなり、一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらはすを法則とはまうすなり、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに廣大の利益を

得るといふ、嗚呼求めずして來るは佛の自ら求めたまへば也、知らざるに得るは佛の自ら與へたまへば也、されば自然にさま〳〵のさとりをひらく法則の左訓に曰く、ことのさだまりたるありさまといふこゝろなり、と、嗚呼如來の自然にはからひさためたまふ法則なり、行者のはからひは律法也、自力也、虛飾也、僞善也、虛假也、邪僞也、姦詐也、蛇蝎也、雜毒也、是れ信仰なき生活也、信仰なき道德也、吾人は世の道德を先きとして身心を苦勵して晝夜十二時に急に走め、急に作して頭燃を灸ふが如くする底の人を見る毎に一種言ふべからざる如來悲憫の涙を仰がずんばあらざる也。

嗚呼如來の法則を知らざるの人は人爲世上の法則に躊躇して光明遍照の世界に遊ふを知らず、たとひ如來の法則を口にするも眞個に如來不可思議の慈愛を信ぜざるものは如來の名の下に自己の法則を作爲して自ら聖賢たらんことを期するが如し、憐むべきかな、何ぞ如來不可思議の御力を信ぜざる、信仰は人に道德を行はしむる手段に非ず、宗教は人を聖賢たらしむる道具には非ざる也、信仰は寧ろ人間自力を以て道德だにも行ひ得べからざるを目覺せしむること也、宗教は寧ろ吾人漫に聖賢を以て自ら任ぜずして古聖賢の下に頭を低ふすべきを自覺せしむる也、此に於て眞正の道德初めて萌し、絶對の光明既に頭上に在り、求めざるに道德自ら來り、知らざるに無上の功德を具足す、人生之によりて道德あり、人生之によりて功德あり、あらゆる無量の德は自然に信仰の人に集り來る。

善導曰く、但有專念阿彌陀佛、衆生、彼佛心光常照是人。攝護不捨、總不論照攝餘雜業行者、此亦是現生護念增上緣と、最も注意すべき眼目は專念の文字なり、之を他の雜業の文字と照映し來れ、信仰は專心也、專心也、專修也、人生たゞ佛の慈愛のみ也、佛の外に道德なし、佛の外に生命なし、佛の外に幸福なし、如來已外に道德を行はんとし、生命を認め、幸福を求むるの人はたとひ口に佛を稱するも專心にあらざる也、雜業也、雜行也、雜修也、雜心也、雜毒也、されば如來遍照の光明中の人たるあたはざるなり、何んとなれば是れ如來不可思議の力を疑惑して自ら局分するものなればなり、如來矜哀の涙は十方の衆生に注ぎて善惡の區別を沒したまふ、極重惡人唯佛を稱せば我亦彼の攝取の中に在りて、煩惱眼を障へて見奉らずと雖、大悲倦むことなくして常に我を照したまふ、たとひ惡人たらざるも專ら如來を信じたてまつらずんば、自ら

如來の光明を遮りて自障障他して意義なき人生、生命なき生活に陷らずんばあらざる也。

聖人此文を釋して曰く。

但有專念阿彌陀佛衆生といふは、ひとすちに彌陀佛を信じたてまつるとまうす御ことなり、

彼佛心光とまうすは、彼はかれとまうす、佛心光とまうすは無碍光佛の御こゝろとまうすなり、

常照是人といふは常はつねなること、ひまなく、たえすといふなり、照はてらすといふ、ときをきらはす、ところをへたてす、ひまなく、眞實信心のひとをはつねにてらしまもりたまふなり、かの佛心につねにひまなくまもりたまへは彌陀佛をは不斷光佛とまうすなり、是人といふは是は非に對することはなり、眞實信樂のひとをは是人とまうす、虛假疑惑のものをは非人といふ、非人といふは、ひとにあらずときらひ、わるきものといふなり、是人はよきひとゝまうす、

是れ則を釋するに法則を以てすると好一對、是人を釋する是非の是を以てす、信仰の人は是人也、不信疑惑の人は非人也、信仰ある生活は是なる生活也、正しき生活也、眞なる生活也、實なる生活也、不信疑惑の生活は非なる生活也、邪なる生活也、僞なる生活也、虛なる生活也。

攝護不捨とまうすは攝はおさめとるといふ、護はところをへたてす、ときをわかす、ひとをきらはす、信心ある人をひまなく、まもりたまふなり、まもるといふは異學異見のともからにやふられず、別解別行のものにさえられず、天魔波旬におかされず、惡鬼惡神なやますことなしとなり、不捨といふは信心のひとを智慧光佛の御こゝろにおさめまもりて心光のうちに、ときとしてすてたまはすとしらしめんとまうす御のりなり、

是れ聖人が信仰の生活の自畫なり、現生十種の益、現世利益の和讃皆是れ聖人の實驗したまひし事實にして上に所謂、もとめざるに無上の功德をえしめ、しらざるに廣大の利益を得るもの、信仰の生活は金剛不壞の生活なり、無碍の一道は一切の障碍に遇ひて始めて其力を顯はし來る、眞正の道は現代の容易に理解し得らるべきにあらず、必ず當時世上の道德眼を以て必ずや、疑ひ、怒り、迫害し來らざるなし、此の如く障害ありて無碍の一道は始めて其光明を發揚し來る、此に於てや律法の道德倒れて信仰ある道德生れ、虛僞の人生破れて

眞正なる人生來る、是れ攝護不捨の人生にあらずや。

總不論照攝餘雜業行者といふは總はみなといふなり、不論はいはすといふこゝろなり、照攝はてらしおさむと、餘の雜業といふはもろ〳〵の善業なり、雜行を修し雜修をこのむものをはすへてみなてらしおさむといはす、まもらすとのたまへるなり、これすなはち本願の行者にあらさるゆへに攝取の利益にあつからさるなりとしるべし、このよにてまもらすとなり。

如來は生命の淵源也、之を信すると信ぜさるとは生死の岐るゝ所、是非邪正眞僞虛實の分水嶺なり、信仰を生命とする古聖賢の身を以て守る所、如來を信ぜざる善は善にあらず、如來を信ずと稱すと雖、如來已外に善を認め且之を雜ふるものは眞實如來を信するものに非る也、現代の宗敎家動もすれば徒に善とし言へは如何なる善をも渴仰して知らず識らずの間に世上衆人の思想に諂ふ、洵に悲むべきなり、若し徒に世人の見に從ふて、唯一信仰の生命を守らずんば如何にして世上に信仰ある道德を興さむ、法然上人若し當時の聖道諸行を廢せずして併せて彌陀念佛を說きたまひなば、何を以てか流罪死罪の大迫害あらむ、親鸞聖人若し持戒淸淨にして單に形式の念佛を追ひたまひなば何を以て世の誹謗を招かむ、言ふこと勿れ、宗敎は狹隘なりと、古聖賢と雖何そ好みて禍を招き又世の謗を買ひ玉はん、然れども法然上人の胸中に湧き出る念佛は念佛の外に餘行を認むる能はざる也、親鸞聖人の信じたまふ本願は、信心已外に一物を存せざる也、此念佛に殉し、此信心に斃れたまふもの、是れ法然聖人親鸞聖人の一代也、如來大悲の恩德は、身をこにしても報ずべし、師主知識の恩德も、ほねをくだきても謝すべし。

此亦是現生護念といふは、このよにてまもらせたまふとなり、本願業力は信心のひとの强緣なるがゆへに增上緣とまうすなり、信心をうるをよろこふ人をは經には諸佛とひとしきひとゝときたまへり、

身を捨て却て身全く、命を投じて、却て命長し、如來の慈懷に入れるもの何ぞ悲眼の外に逸するを得ん、これ、佛法不思議也、佛智不思議也、名號不思議也、誓願不思議也、他力不思議也、義なきを義とする也、是即ち眞實の意義ある生活也、永久の生命ある人生也。

感謝

聖人の一代

親鸞聖人の一代は我等凡愚に如來本願の大悲を味ひ知らしめたまふ事實也、聖人一代の生命は如來五劫思惟の本願也、兆載永劫の修行也、北越關東の流刑聖人の眼中にかゞやきたまふは如來の苦勞也、如來の捨身也、聖人の常の御述懷に曰く

彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしたちける本願のかたじけなき

人生如何なる逆境に處するも彌陀の五劫思惟の苦勞を回想せば何ぞ苦勞と稱するを得ん、人生如何なる艱難に遭遇するも如來永劫の修行に較べば何事か人生艱難と稱するの事あらん、しかも吾人の逆境といひ、艱難といふもの皆是れ自己が煩惱を本として起り來る所、無明の闇黑より釀し來る所、實に是れそこばくの業也、罪惡生死の凡夫也、常沒常流轉也、しかも此の如き吾人の上に聖人が喜びたまひし如來は今も昔も變りなく矜哀の眼を放ちたまふとなし、聖人が示したまひし如來の本願は聖人が味ひ玉はざりし已前より聖人が沒したまひし永久の終まで一一の衆生をみそなはしたまふこと異るなし

十方微塵世界の　念佛の衆生をみそなはし
攝取してすてされば　阿彌陀となつけたてまつる

我今燈下に筆をとりつゝあるの時、あらゆる同朋夢穩かなるの時、亦多くの同胞の苦み惱むの時、一一の衆生の心に如來は攝取の心光を放ちたまひて止むときなし、されば聖人が親鸞一人が爲なりけりと宣ひし五劫思惟の願は即ち我等一人一人の爲なりけり

さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて、我等が身の罪惡のふかきをしらず、如來の御恩のたかきことをもしらずしてまよへるを思ひしらせんがためなりけり

嗚呼此本願なかりせば人生は闇黑也、如來は此闇黑の人生を照さんがために來現したまふ也、一如法界の靈境より放ちたまふ大慈悲の光輪なり、吾人無明界中の盲冥此光輪に遇ひたてまつりて初めて無上淨信の曉に達するを得たり

無明の大夜をあはれみて　法身の光輪さはもなく

無碍光佛としめしてぞ　安養界に影現する。
彌陀成佛のこのかたは　いまに十劫をへたまへり

法身の光輪さはもなく　世の盲冥をてらすなり

嗚呼聖人の一代ましましてわれ等初めて十劫已來の悲母に遇ひたてまつれり、聖人の悲母はすなはち我等が悲母なりけり、聖德太子宣はく我身を生育する大悲の母は西方の敎主彌陀尊也と、聖人亦聖德太子の恩德を感謝して曰く、

聖德皇のおあはれみに　護持養育たえずして
如來二種の回向に　すゝめいれしめおはします

是正に我等が聖人の一代に向て鑽仰し奉るべきの言、聖人即ち彌陀如來の化現也、其一代は實に五劫思惟の體現也、永劫修行の實現也。

慈父釋尊

人生に釋尊の出現ましまさずは何ぞ如來の貴きを知らむ、佛陀の大慈を悟らん、人生直ちに如來を仰ぎたてまつるは釋尊の應現ましませば也、

久遠實成阿彌陀佛　五濁の凡愚をあはれみて
釋迦牟陀尼佛としめしてぞ　迦耶城には應現する

釋尊は如來大悲の恩德をしらしむべく應現し給ひし慈父也、慈父の心は即ち悲母の心也、釋尊の父、彌陀の母、二尊の慈悲は我等五濁の凡愚に向て傾けたまへり、而して五濁凡愚の先達として此父母の慈悲を感謝して示したまひしは親鸞聖人也、釋尊は飽まで親にして彌陀佛と心を一にして我等を護持養育したまふ也、聖人は飽まで如來の子として慈悲の父母を仰ぎたまひ、我等が兄として父母の恩をしらしめたまふ。

釋迦彌陀は慈悲の父母　種々に善巧方便し
われらか無上の信心を　發起せしめたまひけり

唯除五逆、誹謗正法の抑止も五善惡の勸誡も皆大慈嚴父の親心なり、かくて王舍城中の慘劇起るに及びてや、如來遂に默過するに忍びず彌陀悲母の本意を闡顯して、如來應現の眞面目をあらはしたまふ、首を回らせは王舍城中の悲劇は決して意義なきにあらざる也。

彌陀釋迦方便して　阿難目連富樓那韋提
達多闍王頻婆沙羅　耆婆月光行雨等
大聖おの〳〵もろともに　凡愚底下のつみひとを
逆惡もらさぬ誓願に　方便引入せしめけり

二尊の善巧方便は遂に此の如き光明を人生に蒙らしめ給ふ、

而してかくの如きの善巧方便は常に我等が上に蒙れり、釋迦彌陀諸佛の善巧方便なかりせば我等いかでか、かくの如き信心を發起すべき、我等何ぞ如來父母の恩寵を蒙ることの廣大なる、曇鸞和尚曰く同一に念佛して別の道なきが故に、夫遠く通ずるに四海の中皆兄弟たり、脊屬無量なり、焉ぞ思議すべけんやと、十方の衆生同一念佛の兄弟として慈父慈母の護持養育を蒙る、人生初めて春風習々たる一大家庭たる也。

攝取不捨の事

聖人が二尊父母の下に從順なることたとへむ方なし、曰く歸命といふは釋迦彌陀二尊のおほせにしたがひ、めしにかなふとまうすことばなり、殊に末燈鈔に於ける攝取不捨につきての御消息は聖人が如何に二尊の命をかしこみたまひしかを披瀝したまへる告白なり、其敬虔忠愛の御こゝろ身にしみて尊し、曰く

たつねおほせられて候攝取不捨のことは般舟三昧行道往生讃と申すにおほせられてさふらふをみまいらせ候へば、釋迦如來彌陀佛われらか慈悲の父母にてさま〳〵の方便にてわれらか無上の信心をは、ひらきれこさせたまふと候へば、まことの信心のさたまることは、釋迦彌陀の御はからと見えて候は往生の心にうたがひなくなり候は攝取せられまいらせたるゆへとみえて候、攝取のうへにはともかくも行者のはからひあるへからず候、淨土へ往生するまては不退のくらゐにておはしまし候へば、正定聚のくらゐとなつけておはしますことにて候なり、まことの信心をば釋迦如來彌陀如來二尊の御はからひにて發起せしめたまひ候とみえて候へば信心のさたまるとまふすは攝取にあつかるときにて候なり、そののちは正定聚のくらゐにてまことに淨土へむまるゝまでは候へしとみえ候なり、ともかくも行者のはからひちりはかりもあるへからず候へばこそ他力とまふす事にて候へあなかしこ〳〵

十月六日　親鸞御判

眞佛御房

一、法敬坊に、或人不審申され候、これほど佛法に御心をもいれられ候法敬坊の尼公の不信なる、いかゞの義に候由人申候へば、法敬坊申され候、不審さることなれども、これほど朝夕御文をよみ候に、驚き申さぬ心中か、なにか法敬か申分にて聞入候べきと申され候と云云。

《蓮如上人御一代聞書》

講話

自然法爾法語

（求道學會日曜講話）

近角常觀

一

今日は求道學舍の臨時の講話であります、自然法爾といふことについておはなしいたします。

去る六、七、八、三日間大日本青年會の發起により全國の青年の聯合會が開かれた。此度の聯合會と云ふは一言にいへば深くはからはずして自然に成立ち、ことに自然に好結果を得たのである。昨夜も丁度最後の席上で或人が私に三日間の會の了りたる時、如何の感あるかと問ふた。私は云ひました、青年會が年々釋尊降誕會、夏期講習會等を催ふして十六年間、或は盛に或は衰へ、甚しきに至つては如何にもあまり衰へてしまつて、其必要なきゆゑ、降誕會も講習會もやめてしまふと云ふ風に、必要を見とめなくて解散しようとしたこともあつた。けれども時代〳〵の人が盡力したる爲に今日に至りましたは不思議である、實に自然の御力である、と答へました。

ことに今年は初より一所に寄つて會を開きたいと云ふ希望が幹部の人の間にありましたが早々と會が成立ちまして遂にめでたく昨日で閉會したといふ次第です。此三日間には中央部の青年は云ふに及はず、地方より遠路をいとはず來り、現に此處に其地方の方々も三四人列序して居られます。されは中央部も爲に深かき感動受けた。昨夜の感は次の如くである。今迄青年會がだん〳〵と經來たりたる道筋及現今、意外に一つの團體の力を感ずるといふものは實に自然の結果である。自然といつて自然法爾といふ事をつく〳〵味はしていたときました。

なほ其以上に、私が今日自然法爾と云ことにつきて云ふには事實的の感じがあります。

第一青年會自身の何となく自他共に望んだ事が計らはずに自然に運んだ。昨日の信仰談話會で私が告白したるは、始めより何を話さうと考へなんだが遂に何氣なくはなした事は「懺悔錄」にある通りの苦悶より光明に攝取された道行であつた。私は始めより青年會に關係して居ました。最初は唯佛敎を盛にしたい一念で盡力した——固より自分は中心佛をありがたいと信じて居るつもりであつたが——過分な考を起し宗派の改革運動に迄も必死に盡力したが信仰の根底なき爲め遂に苦しんだ。自身には善い事も出來ず、さればとて自身は人に向つて讓る事も出來ぬ、人をよく思ふ事が出來ぬ、人も自分を惡るく思ふてるのでないかと疑ふ、自身を疑ひ、人を疑ひ、八萬四千の煩惱が悉く湧いてきた。實になが〳〵と苦しみ〳〵、苦しみ抜いたあげくに、「あゝ此樣な惡しき者を他迄よくおもふて下され、無限の同情をよせ、見捨てず、此世の親とも友ともなつて下さる方が佛樣だ」と氣附かしていたといた。人とへだ

つ等の事は我が本になつた自身の煩惱であつて、佛の事をよろこばしてもらへば四海の中皆兄弟です。

私の苦悶は第七回の青年夏期講習會の時であつたが、それまでの講習會に盡力したのは皆名利である。今も名利がなくなつたといふ譯ではないが、名利は根底の信仰にかゝる雲の樣なもので決して根本とはならぬ。が其當時は皆名利が元となつて居た爲に、空な處に物がみえる樣に人を疑ひ人とへだつ、全世界を敵としてしまふ、これではいかぬ、人をよくおもはねはならぬと氣づけど實際はそういかぬ。それが漸々と病氣がなほると同時に、佛は親ぢや、慈悲ぢやと自然に信心が開發し、凡て世の樣は一變してしまふた。

年々の講習會には日本に居る間は必らず出席した。昨日も充分に自分の信仰を告白する事のできたも、皆佛の導である。實に十六年間の青年會をおもへは自然法爾てある、佛の御計てある。

て、此度の會につきてつく〳〵自然法爾を味はゝしてもらひ、十六年も自然の御力によりて苦より光明に入りし佛力引導のあとてあるとつく〳〵とよろこばしてもらひ、又今日偶然に自然法爾のはなしをする樣になつたのも不思議である。

此の法語は昨年の夏期會にもはなした。其の後學舍の昨夏の最後の講習會話にもはなした。昨年の講習會には讃岐よりわざ〳〵歸京して話したが、此時小林さんがきゝにきて居られ、夫が御緣で一族よろこばれた。小林さんは此間中病院にはいつて居られたが、今日は退院せられるとの事です。其お娘さんがひどく苦しんて居られたが、よろこばれる樣になつたのも其講話か第一の御緣でありました。

本日皆さんに差あげてある講本は此度わざ〳〵こしらへたのではない。先日若松の求道會で印刷したのてある。此求道會は昨年一人の方が本となつて出來たのてす。此人は和泉鐵次郎といふ方で今も茲に出席して居られます。此人が根本となりて十二人の强固なる團體ができた。其會ではなした講本のあまりをもらつてきたのがはからずも此本てあります。又和泉氏もはからず青年會に出席なさる爲御出になつたのが、今母親をつれられて此座にはからず御出になる。

是をおもひ彼を思ふ、實に不思議である。私ばかりでなく一人一人が、皆自然法爾の御力を蒙つて居るのてある。又福岡大學からも青年會の代表者としてきて御出になりましたが、其方も今日此處に出席して居られます。福岡へは先々月まゐりまして、其青年會の發會式にもつらなりました。

今日出席してる人は數としていへば多くはないが、一人一人にいろ〳〵の道行がある、その徑路をきいたならば如何、私の知つてる丈ても隨分大なる佛の御計のもとに、此處へ集まられる樣になつたのてある。

昨日は今日此會のあることを皆樣にひろくいふ事をわすれました。けれども廣く吹聽して集まるのがよきか惡しきかわからぬ。昨夜の懇親會の時もおもひました、途はんと欲する人にははからず逢ふ。自然法爾は事實から頂ける故本文につきて云ふた處が文字や文句の講釋ではない。何程いふも味は一つにして、なほ云へば云ふほど味彌々深くなるばかりである。今日は之を平易にユツクリと味はふとおもふ何卒一人一

人に過去をおもひ、現在をおもひ、又將來を樂しんて、自ら喜びたまはんことを。

自然法爾法語

親鸞八十八歳御筆

「獲の字は、因位のときうるを獲といふ、得の字は果位のときにいたりてうるを得といふなり、名の字は、因位のときのなを名といふ、號の字は、果位のときのなを號といふ、自然といふは、自はおのづからといふ、行者のはからひにあらず、しからしむといふことばなり、然といふは、しからしむといふことば、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆへに。法爾といふは、如來のおちかひなるがゆへにしからしむるを法爾といふ、この法爾は御ちかひなりけるゆへに、すべて行者のはからひなきをもちて、このゆへに他力には、義なきを義とすとしるべきなり。

自然といふは、もとよりしからしむるといふことばなり、彌陀佛の御ちかひのもとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とはまうすなりとさふらふ、ちかひのやうは、無上佛にならしめんとちかひたまへるなり、無上佛とまふすは、かたちもなくまします、かたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなり、かたちましますとしめすときは無上涅槃とはまふさず、かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて彌陀佛とぞきゝならひてさふらふ、彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり、この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことはつねにさたすべきにあらざるなり、つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことは、なほ義のあるべし。

これは佛智の不思議にてあるなり。

よしあしの文字をもしらぬひとはみな、
まことのこゝろなりけるを、
善惡の字しりがほは、
おほそらごとのかたちなり。
是非しらぬ邪正もわかぬこの身なり、
小慈小悲もなけれども
名利に人師をこのむなり。

求道を講讀して御出の方多き故申上るまてもないのであるが、參考の爲ょんだ次第てす。此自然法爾章は第一卷の十一號(四年前の求道)に「自然法爾は信仰圓熟の極致なり」といふ文章がある。第二卷の初めに「信仰圓熟の時期」等がある。又昨年夏期講習會に、講した概略は第三卷の講話欄にのつてる、かく求道誌上には數回のつて居る。況んや今年は熊本に若松に此法語を講じたから、何度かわからぬほど此味をよろこばしてもらふてる。

抑も此自然法爾といふは親鸞聖人の三帖和讃の奥書にあるのてす。度々申しますが親鸞聖人の著書は「敎行信證」、「三帖和讃」等てある。「敎行信證」は信が根本になつて出來て居り、三帖和讃は韻文て佛德を讃じてある。此他の著書としては「略

文類」、「愚禿鈔」其他は「唯信鈔文意」「末燈鈔」等の極平易なものである。此中で最も聖人が力を入れて屢改作し注意してものせられたるは「教行信證」と「御和讃」である。

これは附けたりであるが、先日若松からかへりに汽車の隅の方で唯信鈔を讀んで居りましたら、川俣といふ處の一老人か私の讀んでるのを横からのぞき、「たいそうよい本を御よみなされます、わかりよくて實に結構です、」と頻りに感心して居られましたから、私はそれをあげましたら大層よろこんで後に手紙をくれられました。かくの如きは此本が眞實人にわかる樣にと親切にかいてあるもの故七百年後汽車中でよんで居たのが人をひきつけたのです。

さても此法語は和讃の奥にあつて親鸞聖人八十八歳御筆とあれば、御著書の中の最も古きものであると先年南條先生も仰られました。(末燈鈔にも此自然法爾といふ事が出て居るが八十六歳御筆とある。)最後のものといへば丁度釋尊の涅槃經の樣なものである。九十年の間彌陀の本願をとき、何もなしにたゝ喜こんだ後、充分圓熟した信でかいた法文である、自然の味を自然法爾の心で自然法爾の筆でかいた法語であります。孔子が「七十にして心の欲する處に從へども矩をこへず」といはれた樣に、心におもふたまゝが自然法爾な立派な文章となつたのである。

度々はなしますが、獲の字は因位のときうるを獲といふ、得の字は、果位のときにいたりてうるを得といふなり、名の字は、因位のときのなを名といふ、」獲も得もうると云ふこと、うるを釋して因位のときうるを獲といひ、果位のときにうるを得といふてある。

獲とは如何、信一つをうることである、「教行信證」の中でも信が眼目であります。即ち信の卷の序に

それ惟みれば信樂を獲得することは如來撰釋の願心より發起す、眞心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり、

實に是を親鸞聖人がかいたときは如何。昨日の告白にも云ふたが、私は佛の御めぐみに氣がついて非常に喜ばしてもらふた。が、偖何てこの樣に信が得られたか、自然である。しかし打捨てゝおいて得られたのではない、實に佛の御力によりて得さして下さつたのである。もし打捨てゝおいて信か得られるなどいふならば、これは印度の自然外道の樣なものである。いつのまにか體が大きくなり、學問もできたではない、其本は親が心身共に非常な御苦勞をして育てゝ下された結果、身體も學問も立派になつたのだ。同樣に信を獲る事の出來たのは全く佛の親心から出來たので、我心に開發したのは佛の御恩が我身にあらはれたのです。阿彌陀如來がありがたい、よく我等を成育して下されると、よろこばしてもらへば、釋尊は此阿彌陀佛を我等に知して下されたの故に、區別は毫もない、即ち阿彌陀佛は母、釋尊は父二つではない一つである父母の恩は一つである。

此信樂を得ることは實に如來の善巧方便より發起したのである。親鸞聖人が如何に力強き自信力を以て此文をかゝれたかは、此眞筆でわかる。これは淺草の報恩寺にあります。年に一度虫干がありまして、大にも見せます、大きい美濃紙にかいた勢勇猛なる筆つきの大さ、實に力が充滿してゐる。昔

は此獲といふ字を獲とかいたとみへる。其字筆は非常な勢てある。御自身の自信と歡喜の極が筆先きにあらはれてあると、私はつく〳〵ありがたく拜しました。

まことに我々がひとりでに得たのではない、佛が長い間因位のときに成就しておいて下されたのだ。即ち昨日も管瀨さんが話されましたが、彌陀佛の御苦勞は實に乳を吸ふこと大海の如く、肉は大山の如く、骨を積むこと亦大山の樣である。世々生々にかくのことくして身を施し法をとかれた、實に永劫の間の佛の御苦勞である。親鸞聖人の上からいへば、いつもいふ事であるが、むかし如來樣が御苦勞をなされて我等の爲に御修行なされたときには、三業の修したまふところ一念一刹那も清淨たらざる事なし、眞實たらざることなし、この佛の清淨眞實を我々の上にいただいたときは我々が出來るとおもふては駄目である。如何となればかゝる汚れた惡しき麁なるもの、丁度佛樣の正反對の惡と汚の塊の者の爲に永劫の昔に得ておいて下されたのである。これを因位といふ。又かく我々の爲に御修行下された御めぐみがあらはれて佛となられたが果位である。まことに諸佛菩薩、數は無量であるが、皆我等を保護して居て下さる。是阿彌陀佛の化現であつて、中心はみな此如來に歸するのである。即ち一佛一切佛、此慈悲が凝つて本師法王の阿彌陀如來とあらはれたのである。されば此一通りならぬ佛の御苦勞をもて修し下された結果、此ありがたい信が我等けがれたものゝ中心にいただけたといふ事は、一通りのことではない。

さらば此慈悲は昔あつて今はなきか、否丁度親が子を念々にわすれざるごとく、久遠劫以來の佛の無限の大慈悲心は今現に生きつゝあるのである。

名の字は因位のときのなを名といふ、號の字は果位のときのなを號といふ。

これは南無阿彌陀佛の事です。名の方も此南無阿彌陀佛、號の方も此南無阿彌陀佛である。我々は此南無阿彌陀佛は常にきいて居るのであるが、此名號は空に非ず、名號に應ずる實がある。南無阿彌陀佛は我々が父母にむかひ、父よ母よとよぶ樣なものであるが、此方より我力でよぶ事のできるものでない。前にも申したとほり、永劫の御苦勞の結果できたもの故、我々の方からでなくして親の方よりの名のりである。此樣にして我は汝を待つと名のりをあげて下されたのが南無阿彌陀佛の名號である。

度々いふ如く昔よりの名號は此方より佛を求めるのであつた。が他力の方では向ふの方より呼びかけて下されるのである。法然聖人は彼の佛の願に順ずるが故にとあるを見て大に歡ばれた、實に願が本である。願といへば直ちにどういふものかせんさくしたがる。研究ではない、佛が如此く迷ひて眠れる者に向つてじつとして居られず呼おこしてやらうとの佛のあはれみが永劫の修行の根本である。因位の願行、果位の滿德の源である。世間の事も然り、即ち青年會も諸君の念力でなるのである。佛が助けたいとの願が現はれて我に至り信を得る。我々の稱へたる名號は初めて佛のめぐみをよろこんだときあゝありがたい。

何事のおはしますかはしらねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

で、南無阿彌陀佛とよろこぶのである。かくの如く名は廣大なる御力の果、其を獲得せしめられたのは願が自然に我等の上に届いたのである。即ち獲得名號といふは皆同じ佛の願から然らしめられたのである。歎異鈔に「誓願不思議を信じて念佛申すか、又名號不思議を信ずるかといひおどろかして、二つの不思議の仔細をも分明にいひひらかずして、人の心をまどはすことこの條反す〳〵も心を留めて思ひわくべき事なり、誓願の不思議によりてたもちやすくとなへやすき名號を案じいだしたまひて、此の名字をとなへんものをむかへとらんと御約束あることなれば、まづ彌陀の大悲大願の不思議に助けられまゐらせて、生死をいつべしと信じて念佛まうさるゝも如來の御はからひなり云々」。不思議に二つはない、一つだとかいてある。たゞ不思議を信じて名號をとへるひとを助けるとの御仰どほりを、あゝありがたい南無阿彌陀佛と喜こばしてもらふのである。

同じく十六章に「わろからんにつけてもいよ〳〵願力をあふぎ參らせば自然のことわりにて柔和忍辱のこゝろもいでくべし云々」。でたとひいかに此方が惡しきことありとも、たゞ〳〵の其源の本願をあふげば自然によきこゝろになるといふ事をかいてあるのです。即ち信も名號も自然である。

自然といふは自はおのづからといふ、行者のはからひにあらず、しからしむといふことばなり、然といふは、しからしむといふことば、行者のはからひに非ず、如來のちかひにてあるがゆへに。

極わかりやすい「歎異鈔」に

しかるに自然といふ事の別にある樣に我ものしりがほにいふ人のさふらふよし云々

自然に氣がついてやさしい心もおこり念佛のいはれる樣になるが自然 法爾の御力、むづかしい事ではないとの義である。

自然といふは自はおのづからといふ。此方が手をつけるのはおのづからではない、草の生へて成長するのは自然である。此方の手をさゝぬがおのづからである。此方が信を得るんだと計らふは「おのづから」に非ず、日が東天に昇れば夜はあける、おのづから佛がはからはせたまふ。「おのづから」より然らしむにすぐ移る處がありがたい。

然らしむとは如何？行者のはからひに非ず」である。よく氣をつけぬと所謂自然外道に落ちる。

監獄の囚人などもヤケになると「ホッテオケ」とよくいふ、してみようがないといふのも一種の自然であるが、此の文にある自然といふは此方は光明の佛界に向つて何一つ出來ぬ淺ましい者なれども。佛が私に然らしむるのである。子を失ふも貧も苦も皆佛はよき樣にはからはせたまふ。たとへ苦しみ、悲しむは、自身の業で苦しみ悲しむのであるが、其間にも大悲の佛は隙を貫して御慈悲をそゝぎよき樣にして下さる。如來のちかひにてある故にまちがひはない。

法爾といふは如來の御ちかひなるがゆへにしからしむるを法爾といふ、

本來法爾といふ事は昔から云ふ、柳綠花紅本來法爾であ

る。けれどもこゝの法爾といふは如來の御ちかひなるがゆへにしからしむるを法爾といふ。全體文字にかゝはらず思ふまゝに自由に讀むのが鎌倉時代の讀み方であつた。法爾に佛の力で然らしむ、たとへは物を落す、自然に落ちるといふがそこには引力あればこそ落ちるのである。私等もひとりでによろこべたといふが、皆佛の廣大な御力があつたればこそよろこべたのである。空でない、力の充滿した結果、私に信が生じたのである。

之は前より氣がついたのであるか、法然聖人の法然といふ字に自然法爾の意味がある樣に思ふた。氣づいてみれば親鸞聖人は法然聖人の御教へ其儘を申されたので、其以外にない事がわかる。「黑谷傳」の中には又聖人つねに仰せられし御詞として次のやうにあります。曰く

法爾の道理といふ事あり、ほのをは空にのぼり、水はくたりさまにながる、菓子のなかにすゝ物あり、あまき物あり、これらはみな法の道理なり、阿彌陀佛の本願は名號を以て罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給ひたれば、たゞ一向に念佛だにも申せば佛の來迎は法爾の道理にて疑無し云云。」

自然法爾の理はりは親鸞聖人の自身の發明かとおもふたら、全く法然聖人の通りをいはれたのである、實にこれて私は益々ありがたくなりました。親鸞聖人九才のとき

あすありとおもふこゝろの仇ざくら
夜半にあらしのふかぬものかは

といふ歌をよまれて世の無常をかこち出家せられた事にしても、初めは聖人があまり早熟であるとおもふてた。しかし此歌は聖人のものでなくして「古今集」にある歌をよまれたのであつた。聖人は歌が主でない、其感じが實際あつた事がありがたいのです。其通り親鸞聖人は二十九才御信心をよろこはれてから以來、九十年に至るまで諸所を傳道して、—九十年といへは一口にいへるが、其間の苦勞御經驗はどんなであつたらう—其間に信仰は益々深く圓熟されて、もう御臨終の間ぎわにかゝれた此法爾章である、それが決してめづらしい自身獨特のものにあらずして先師法然聖人の通りをかいてある、實にありがたいではないか。この先師のいはれたとほり、敎へられた通りを、すら〳〵と充分其の味をしつてかゝれた、これでこそ自然である。自らめづらしい事をかいたなら自然ではないのである。九十年やつて〳〵やりぬいた最後、はからはずして先師の御仰そのまゝいはれた處は、聖人の何のはからひもなき證據である。

然るにもし我等が我計らひを出す時は必ずよい事はない、私は昨年の講習會に遠方から歸つてきてはなしをしたに、人數がまことに少數であつたのを嘆じた。が是は我計らひであつて其中に一人其が御緣になつて信を得た人があつた。即ち前々號の告白にもあつたとほり田中みな氏が其時出席して私のはなしをきいて居られた。

我々が我々の計らひ心を大海の水の一たらしても佛以外に混じたらだめである、僞である、虛である。法然聖人の御言葉のとほり、此の悲しき者が自然に佛のよろこばれる樣になるは實に佛の御ちからだといはれたのは、我計らひなくして佛の御はからひでよろこばれる樣になれるといふ事をいはれ

たのだ。

全じく昨年の講習會に、こじつけかもしれぬが法然の法と然とは自然法爾から名づけたのではないかと云つて置いた。處が先頃みれば「和語燈錄」に法然聖人の言葉として法然といふ名は自然法爾の道理にもとづいて先師がつけて下さつたのだといふ樣な意味の事がかいてある。してみると私の想像してゐたとほりである。親鸞聖人は御師の名から法爾といふ事をよろこばれたのではあるまいが、常に法然聖人がいはれた爲に終に自然に此法爾章をかゝれたのであらう。

私等も其通り聖人と同樣に御めぐみの力をうけてゐるのである、皆同一に信を戴かしてもらふ事が出來る。「此ゆへに他力には義なきを義とすとしるべきなり」さればたゞ何の理屈もなく佛の御はからひにまかせたてまつる斗りである、たゞ佛の御はからひのみである。

此義なきを義とすといふ言も法然聖人の御言葉である。「義といふことは行者のはからひに非す。」等と師がいはれた。

偖てこれまではすべて文字のわけであつたが此次は味である。

自然といふはもとよりしからしむるといふことばなり、彌陀佛の御ちかひのもとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを自然とはまふすぞときてさふらふ。

これは如來の誓をかいたのである。自然とはもとよりしからしむといふ事、(本來法爾ではない)もとよりといふことは佛の永劫の御苦勞、御心勞、理屈からをすとわからぬが、眞實に親のめぐみに氣がついてみればすぐわかる。十劫永劫の御呼聲、即ち永劫の昔よりある本願の源である。長者窮子の通り昔より佛は我等を長者の子をさがす樣に求めて居て下される。これが氣づかしていたゞけば理屈をはなれて成程五劫思惟も親上だとよろこばしていたゝける。

親鸞聖人が「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人が爲なりけり」とよろこばれたもこゝだ。非常に大きい事になつてきた、人世上にては他人との間の關係になるが、そんなちいさい事ではない、我々に對して如此きめぐみあり、知らざりき、すまなんた、と喜こぶと同時に十劫の五劫といふ事もわかるのである。日々世間の事にあくせくして佛の御慈悲に氣づかざるもの、何て理屈から十劫とか本願とかいふ事のわかるものですか。

昨日も云ふた、眞實ありがたいと佛の御慈悲をいただいたときの喜こびは瞬間、あとより其御慈悲とは何かと退ぞいてみれば、釋尊の本生譚にもある如く、無始よりこのかたの佛が衆生の爲に如何にして如何に心を碎いて苦勞して居られたかゞわかる。其の如く諸佛菩薩一々願をおこし行を修し、我々に廻施したまふ。これらは皆阿彌陀佛以外に非ずして、ひつくるめて彌陀の御慈悲の力となつて我等に灑ぐのである、されば此御慈悲には宗旨の別が無い。

彌陀佛の御ちかひのもとより行者のはからひに非ず、行者には些もよらずして、たゞ佛の御ちから成りたるのである故、行者のはからひにあらずといはれたのである。「南無阿彌

陀佛とたのませたまひて」といふことは、佛の本願である。南無阿彌陀佛をとなへるのである。ありがたく心から稱へる故に口に南無阿彌陀佛と出たときがそのまゝ信心ぢや、むづかしい事ではない。

たのませたまひての一言には人生のすべてがふくまれてゐる、人生に於て南無阿彌陀佛の他は一切空である。いつはりである。其他に餘の善行なし。

むかへんとはからはせたまひたるによりて行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを自然とはまふすぞときゝてさふらふ。

たゞ自然法爾である「よからんともあしからんとも」の言てすべてつきて居る。人間の間違の本はこのよからんあしからんである。彌陀の五劫思惟の本願を案ずれば—いままた案ずるに善導の自身は現に是罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に沈み常に流轉して、出離の緣ある事なき身と知れ、云々。」此通りで佛の御慈悲に救はれ奉らずはいつまでたつても我力で此苦界を出離する事は出來ぬ。理想家は人をよくし樣として苦しむ、すべてよからんとかあしからんとかと苦しんで居るのである、はからふて居るのである。我身は現に生死流轉の凡夫だ、自分で實際苦しんでしまふ、つまり自分の惡がわからんからだ。永劫以來の御めぐみがわかれば、「成程佛のめぐみにはなれて、長い間トボ〳〵と心寂しい道を一人で通つてきた。かくの如くいつまで立つても經續して行く故、「出離の緣ある事なし」といはれたのである」もう人の惡等は眼中になし、たゞ自分と佛のみの世となる。

こゝだ、此惡しき者が佛にもう逢ふ事が出來ずば、出離の緣なき者をとの一念が信心である。無間地獄に落つべき身であるに佛にひきあげられて佛の御恩に甘へる處である。歎異鈔のさればかたじけなくも我御身にひきかけて我等が身の罪惡の深きほどをもしらず、如來の御恩の高きことをも知らずして迷へるを思ひしらせんがためにて候ひけり、

て親鸞聖人が云ふから貴いといふと聖人は却つて御困りなさる。文にもあるとほり御身にひきかけて云々とある。これは我等が世間に對したときは成程人並にはちがひないが、佛に對しては實に惡しき迷へるものであることをしらせん爲である。自分の惡しき事、又此樣にあしきものが佛に救はれるのだといふ事をしらずして、世人はたゞ目前の事にのみ迷ふてると自身にひきかけていはれたのである。

まことに如來の御恩といふ事をばさたなくして我も人もよしあしといふ事をのみまふしあへり、聖人の常の仰せには善惡の二つ總じてもて存知せざるなり、その故は如來の御心によしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとをしたらばこそあしきをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこと皆以てそらごとたわごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそ仰せは候ひしか。云々。

眞に我々かよいとかあしいとか、闇に居ていふてることは皆駄目。監獄で改心してから歸るといふてる囚人があるが、改心とは何を意味するのであるか。迷中の善事はやはり迷、自

身佛の大悲を仰がぬ中はよいと云ふもあしといふも駄目である。又面目ないとか何とかいふてるが第二の迷である。是が又第二の犯罪の本となる。善魔の善である。如來のよしとれぼしめすほどのことは出來ぬ。

行者のよからんともあしからんともおもはぬを自然とはまふすぞときゝてさふらふ、

自分が改心してみようといふのもいかぬ、親のすてぬうちは助かる、たゞ深く自分の惡を懺悔し同時に計らはず佛を仰ぐ斗りである。よいのわるいのと計らふよりは眞のめぐみに入らしてもらふた處で安心するのが一番いゝ。歎異鈔の「惡をもおそるべからず」聞きぞこなへば大錯である。よいとも惡ともおもはず、なんでもかまはぬぢやない。又惡もおそれないでやれと單に是丈ではない、自分一人で佛樣のおぼしめす樣なよい事は出來ない、たゞ佛をよろこんで居るのだから其他に善も用に非ず、又惡もおそれる事はないと佛樣がいふて下されるのである。一人でよい事がやれるならば勝手にやれはよい、しかし一人でやつて行けぬ故親の處へかへつてこいといふのだ。自分の樣な汚れたものだめだといへど汚れただめなものなれはこそこゝに廣大な佛の願があるのである。惡人を救ふ爲の願であるに、其事をきゝながらこれては信を得られぬの、あまり惡しき者だのと、自身のみを眺めて佛を仰かずしては佛の仰にそむく者ではないか。其樣な人は然らば誰に救ふてもらふのか。世には惡人を救ふて下さる方は佛の他に一人もない。成程自身わるいといふてるは謙遜の樣なれども、實際は憍慢である、我力をもつてやらうとしてるのである。自分のちいさな力で生死のきづなは何年たつてもきれるものではないたゞサウカとすなほに行けはよい。

（此あしからんとは又惡くならうといふ方にもとれる、即ちよい事をしようともおもはなければ又あくをしようともおもはぬ。）

以上のあやまりやすい處は惡るくなつてもよいといふではない、たゞ佛がありがたいといふ事である。これ丈である。以上は言葉つきていへぬ。

自分のはからひすくして南無阿彌陀佛とたのませたまひては、念佛成佛の味、佛の御めぐみに氣づいてみればたゞ南無阿彌陀佛の味よりない。法然聖人が日に數萬となへられたのは實に味深い。親鸞聖人は法然聖人と別のことは少しもない。佛の方から迎へんとはからはせたまふのだから、たゞ念佛して佛に迎へられるより他はな　念佛成佛是眞宗である。

和讃に

信は願より生すれば、　念佛成佛自然なり、
自然は則ち報土なり、　證大涅槃疑はず。

すなはち我等の信は佛の願より生したもの故念佛して佛になるといふのは自然の御力である。

「自然は則ち報土なり」、とスグひッかけてある、報土とは眞實の極樂無爲の大涅槃の境である。これからあとの半分が其涅槃の境につきてかいてあるのです。此自然は則ち報土なりといふはなぜか、則ち大涅槃を證する事は自然である故に、此次に「ちかひの樣は無上佛にならしめんとちかひたまへるなり」

とあるはこの處です、

極樂の眞の樣は自然である、昔から自然を解釋するに三種あつた。願力自然、無爲自然、轉倒因果の自然、第三の轉倒因果の方はさしおき、願力と無爲とは、今迄は願力であつて、無爲はあとの無上佛とわけてある。しかし、同じ自然を二つにわけて意味をわけるのは快惡し。第一と第二は同樣でないと意味が移らない、それが彼の和讃、念佛成佛自然なり、自然は則ち報土なりで、願力自然の極が無爲自然である、されは二つではない一つである。私が四年前信州に於て作つた讃の中に、山間忽落花一輪　長江萬里水上浮、飄然去來到彼岸とかいておきましたが、それは此處の味をいふたのです。一つの花が山間から落ちる溪川をくる〳〵と廻つて、千曲川から信濃川を通り、遂に海に入る。一輪の花が海へ出られたのは川の流の力である。其の如く我等が佛の惠に入つたのはもとより佛流のトー〳〵と流れてる其力によりて、種々になつて眞如法性へ入るのてある。谷川の水と海の水と二つはない如く、自然は即ち報土てある。

信仰生活は眞に溪川を下つて行く花の如くに遂には自然の淨土に行かしてもらへる。其溪川に落ちたときはや大海へ出る樣な運命をもつて居る。人生を流れる佛の願力、念佛成佛自然てある。花が海へ出るときが肝要ではない、溪川へ落ちたときにはや往生は定まつて居るのだ。

此の如く說き來れば非常に純粹な眞宗の話てはあるが、眞宗のみてない、釋尊のとかれた華嚴も法華も一つである、皆此自然法爾の味の他はない。

涅槃經に佛が入滅せられんとしたとき阿難が悲しんだ。釋尊は盛者必衰、會者定離、如來の色身は滅しても法身は亡びぬ、如來は常住で變易あることなしといはれた。此が極樂無爲涅槃界である。眞宗といつても別に一つの宗派を押し立てたのではない、佛敎の眞隨を說いたがかりてあります。念佛成佛是眞宗の眞宗であります。

二

此より後半分をお話いたします、まづ初めに、此の自然法爾章に於て最も間違ひ易い處は此のあと半分である、玆を讀み違えると意外なる誤解に落ちるのてあります。第一今日青年諸君の多くは玆の處をどう讀まれるかと云ふに、「ちかひのやうは無上佛にならしめんとちかひたまへるなり、無上佛とまふすはかたちもなくまします、かたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなり、かたちましますとしめすときは無上涅槃とはまふさず」とある、して見れば無上佛と言ふも結局は形の無き佛てはないか。又「かたちましまさぬやうを知らせんとて、はじめに彌陀佛とぞ聞さならひてさふらふ、彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり」とある。即ち彌陀佛といふも唯此の自然のやうを知らせんが爲めてある、去れば先程より段々言ふ處の阿彌陀佛も結局は此の宇宙自然を言つたのてある、自然宇宙てある故に形の無き佛と言つのてあると、かういふ風に讀む人が多いのであります。

けれども此は非常なる間違てあります。處が此考は、ひとり自然法爾章を拜讀する上にのみ限らぬので、今日一般に信仰

の問題に心懸ける人々の間に於て意外に廣く行はれて居るのである。即ち今日の少し智識ある人々は如何に考へて居るかといふに「理屈上佛陀は無いものである、唯宇宙絶對の存する計りである」と、こう考へて居る。そうしてその宇宙絶對をもとゝして自分の信仰を固めやうと思ひ、遂には宗教上の佛陀と哲學上の本體とを一にして、佛陀即ち實在であるとやうに考へて居る人が多いのであります。其處で初めに茲の味から話してゆかうと思ひます。

先づ第一に斯の如く宗教上の佛陀と哲學上の實在とが一つであるとして見れば、宗教と哲學との區別は立たなくなるのであります。之は眞宗といはず、他の教えといはず、廣く宗教全體の上から見てさうなのである。今日の哲學者の中には眞如や法性を以て直ちに哲學上の實在と見て說かうとして居る人もある。けれども此は間違であります。眞如や實相と言ふ事は決して哲學上の本體では無い。或は諸法實相といふ時は、自然宇宙といふのと同じ樣にも思はれるが、決して斯くの如き冷かなる哲學上の世界觀では無いのです。諸法實相とは佛陀の御眼にうつりたる世界を諸法實相といふのである。一言に云へば眞如、法性、實相とは佛の境界を指したのであると言ふ方が早いのであります。すると今日一般の考とは非常に違がつて來る、眞如法性は佛陀廣大の境を言つたのである、實相とは佛陀の御眼に映じたる、世界である、我々人間の見る迷の世界ではない。柳は綠、花は紅、色即是空、空即是色の廣大なる妙境界が即ち眞如、法性、實相の眞相なのである、此點は考の上にはつきりと際を立てゝ措く方がよいと思ひます。今日人の能くいふ本體といふ考は、私は寧ろ青年の信仰を毒する病弊であると考へる。反へす〳〵も眞如、法性は佛の悟の境界、實相は佛の御眼に映じたる世界であります。

偖て進みて申しまするに、此の法語の中に無上佛と示されたが其處の眞如法性の境界である。處が我々は直ぐに其眞如法身の無上佛を信じて、すぐに其境界に行く事が出來るかと云ふに、夫は出來ぬのである。夫が出來る位ならば初めから阿彌陀佛はいらぬのです。其處で「ちかひのやうは無上佛にならしめんとちかひたまへるなり」、で佛陀の誓ひを信ずれば必ず無上佛の境界に爲て下さる、茲に無上佛とは我々が本願を信じた其の結果を言つたのであります。則ち先きの河の譬へで云ふならば彌々悟りの大海に流れ込むだ處が無上佛の境である。然るに我々はやゝもすると之を直ちに我々の信ずる佛陀即ち信仰の對象としたがる、故に、前半分と行き違ひになり、願行を仆さねばならぬ事となるのです。之を釋尊の上より頂いてもさうである。釋尊は彌々涅槃に入り給はんとする時に所謂「色身は滅すと雖も法身は滅すること無し、如來は常住にして變易あることなし云々」と示された。法身の如來は永久常住にして變はる事ないといふは此の無上佛の境を指されたのであります。

次に之を親鸞聖人の信仰の上より頂く時はどうかといふに、我々は此の人生を畢りて次の生に於て初めて無上佛の境界に行く事が出來るのであります。其處で一寸茲の處を教、行、信、證の四つに當てはめて見ると、「彌陀佛の御ちかひの」

とあるが教である。「もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて」迄が行である。次に「行者のよからんともあしからんともおもはぬを」といふが信である。最後に「ちかひのやうは、無上佛にならしめんとちかひたまへるなり」とあるが今の眞如法性の證であります。其處の味を又『證卷』には

煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行をうれば、すなはちのときに大乘正定聚の數に入る、正定聚に住するが故に必ず滅度に至る、必ず滅度に至るは即ちこれ常樂なり、常樂は即ち是れ畢竟寂滅なり、寂滅はすなはちこれ無上涅槃なり、無上涅槃は即ちこれ無爲法身なり、無爲法身は即ちこれ實相なり、實相は即ち是れ法性なり、法性は即ち是れ眞如なり、眞如はがちこれ一如なり、然れば彌陀如來より如來生して報應化種々の身を示現したまふ。

とあります。外の教では此の世に於て直ちに法身を見るのであるが、我々煩惱成就の衆生に於ては此世で直ちに法身を證する事は出來ぬ。唯佛陀の御惠みを喜ばして頂く間に「念佛成佛自然なり、自然はすなはち報土なり」で、いつしか自然に其境に行かせて下さる、實に佛廣大の慈悲であります。私が此法語を特に聖人の「涅槃經」であると申す所以も茲にある、親鸞聖人が御一代九十年の間必死と諸方に御化導の後、もう御晩年になつては少しも理屈は仰せられぬ、彌々御往生の二年前に於て、恰も釋尊が御涅槃の時「如來は常住にして變易あることなし」と示されたと同じやうに「ちかひのやうは、無上佛にならしめんとちかひたまへるなり……」と喜ばれたのである。もう此の時聖人の御眼には極樂淨土の有樣があり〳〵見えて居るのであります。猶ほいつもいふ和讃であるが

超世の悲願きゝしより、我等は生死の凡夫かは、
有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ。

これも御晩年の作である。これてみても當時の御喜びの程が能く伺はれるのであります。

次に「無上佛とまふすはかたちもなくまします、かたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなり、かたちましますとしめすときは無上涅槃とはまふさず」願力自然より無爲自然に移る味は茲でよく頂く事が出來るのであります。則ち河の譬で言ふ時は谷川の水は流れて大海の水となるのである、今我々も願力の自然を信じて念佛して居ればやがて自然の報土に往生するのである、即ち「念佛成佛自然なり」の願力自然が、落ち行く先きは「自然はすなはち報土なり」の無爲自然であるとは明らかであります。其處で聖人の『教行信證』中には此の無爲自然を說いた御文が澤山引かれてある、先づ大無量壽經を引いては

顏貌端正にして世に超て希有なり、容色微妙にして天に非ず人に非ず、皆自然虛無の身無極の體を受く。

とある。即ち無上佛の境界は形が無いと言つても唯普通に形が無いのては無い。實に絶體の境界で有れば顏容端正にして天にあらず人にあらず、何とも言ふに言へぬ自然虛無の有樣なのである。決して空々寂々たる本體の如きては無いのです。次に亦『證』の卷には善導大師の御文が引れてある。曰く

西方寂靜無爲のみやこには畢竟逍遙として有無をはなれたり、大悲こゝろに藴じて法界に遊ぶ、分身してものを利する事ひとしくして異ること無し、或は神通を現じて而も法を說き、或は相好を現じて無餘に入る、變現の莊嚴こゝろにしたがひて出づ、群生みるもの皆のそこる、と、茲に有無をはなれるとある處か實に絶對の無上佛の境なのであります。去りながら斯くは言ふものゝ眞實の處は彌々其境界に至つて見ねば解らぬのである。聖人の和讃には

如來すなはち涅槃なり、　涅槃を佛性となづけたり

凡地にしてはさとられず、安養にいたりて證すべし

とあります。即ちひと度安養に行かなければ眞實の處を證する事は出來ぬのである。無上佛の境は斯の如く何とも言うてみやうなき絶對の境界である。そこで「無上佛とまふすは……無上涅槃とはまふさず」なのであります。茲の處は實に先きにもいふ如く極樂淨土が眼に見える處を申されたのであります。

猶ほ自然を研究してゆくと、聖人の和讃には自然といふ文字が澤山用ゐられあるのです。先づ極樂淨土の無爲自然を仰せられた方では、

五濁惡世のわれらこそ、　金剛の信心ばかりにて、
ながく生死をすてはてゝ、　自然の淨土にいたるなれ。

あゝ極樂淨土の有樣は人間の言葉では何とも言うて見ようが無い、實に自然の淨土である。自然の淨土は即ち眞實の淨土であります。而して自然でなければ此の自然の淨土に生るゝ事は出來ぬのである、何故なれば自然でなき者は即ち計らひ心の者である、計らひ心の者は金剛の信心といふ事は出來ぬ。

念佛成佛これ眞宗、　萬行諸善これ假門、
權實眞假をわかずして、　自然の淨土をえぞしらぬ。

即ち今の味である。計らひの心は即ち萬行諸善のかりの門に迷つて居る有樣である、萬行諸善に迷つて居る間は自然淨土の境界を知る事は出來ぬ。又曰く

定散自力の稱名は、　果遂のちかひに歸してこそ、
をしへざれども自然に、　眞如の門に轉入する。

定散自力の稱名といふは即ち唯口丈に稱へる念佛である。去りながら此の定散自力の衆生でも、佛に果遂の願あるが故に卒には口に稱へてる中に自然に眞如の門に轉入させて下さる、即ち自然の淨土を知らぬ者でも、亦自然の御力にて、自然に自然眞實の淨土に到らせて貰ふ事が出來るのである、實に何とも言へぬ味はひ無限の大悲であります。偖て以上は無形的に自然淨土の佛陀絶對の境界を示されたのであるが、次に之を有形的に仰せられたのには、

寶林寶樹微妙音、　自然清和の伎樂にて、
哀婉雅亮すぐれたり、　清淨樂を歸命せよ、

有形的に言ふ時は殆んど譬へ樣も無い、丁度涼風木末を渡りて自然に清亮の樂をかなづる　有樣である。

清風寶樹をふくときは、　いつゝの音聲いだしつゝ、
宮商和して自然なり、　清淨勤を禮すべし。

自然の淨土に於ては軒吹く風も自然に音樂の律呂に叶つて居る。

三塗苦難ながくとぢ、　但有自然快樂音、

このゆへ安樂と名つけたり、無極尊を歸命せよ。

之等の和讃を拜誦する時は如何にも自然の淨土たるを思はずには居られぬのであります。斯の如く無形的に惠みの上より言つても自然である。又有形的に言つては、七寶の寶地、八功德水、岸打つ波、軒吹く風皆自然である。人間の言語では有形か無形かの何れかで無くては言ふ事が出來ぬ、故にかく兩面より示されてあるのです。又大無量壽經の中には次の如き御文もあります。曰く

自然の德風徐に動きて微動するに、其の風調和にして寒からず暑からず、溫凉柔輭にして遲からず疾からず、諸の羅網及び衆の寶樹を吹て、無量微妙の法音を演發し、萬種の溫雅の德香を流布す、其の聞く事ある者は、塵勞垢習自然に起らず、風其身に觸るゝに皆快樂を得。云云。

處で我々は斯くの如く言ふ事は言ふが、此の眞實の味は實際其境に到らぬ迄は解らぬのである。然るに聖人は彌々晩年に近くに從ひ「超世の悲願きゝしより、我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ」と、もうあり〳〵此境に一致して居られた、其心持をば直ちにお示し下されたこの自然の味である。本章を聖人の涅槃經でありと申す所以は實に茲にあるのです。

更に進んで「かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめに彌陀佛とぞきゝならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり」。――今其の悟の境より我々迷の境界を見た時には、如何してもぢつとして居られぬ、直ぐ其境より手を出して我々を助け導いて下さる、其の御方が彌陀佛なのである、彌陀佛は茲で頂くのであります。初めに申した善導大師の御文に「然れば彌陀如來如より來生して報應化種々の身を示現したまふ」とあるも即ち茲である。印度にお生れ下された大聖釋尊は即ち此の境より我々を哀はれと思ひ此上に現はれて法をお說き下された方である。乃至諸の佛、諸の菩薩皆な此境よりお出で下されたのである。即ち此の一如法界自然の境より「かたちましまさぬやをとしらせんとて、はじめて彌陀佛とぞきゝならひて候」であります。猶ほ聖人の書物の中には此の事が度々仰せられてあるのです。『一念多念證文』には宣はく

一如寶海よりかたちをあらはして法藏菩薩と名のりたまひて、無碍のちかひををこしたまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふがゆへに、報身如來とまうすなり、これを盡十方無碍光佛となつけたてまつれるなり、この如來を南無不可思議光佛ともまうすなり云云。

此の外『唯信鈔文意』等にも同じ意味の事が度々繰り返されてあります。

其處で、我々は、無明の酒に醉ひ、眠れる者である。其の我々が眞如法性の悟りの境界に對するに、どうしても普通て其間に連絡の出來る筈は無い、處が茲に一人の醒めたる方が有つて其絶對の境界より我々の眠りの有樣を眺めて居て下された。如何してもだまつて見て居る事が出來ぬ故、色々として眠れる我々を呼び醒まし、搖り起して下さる。是が佛陀の慈悲なのである。而して本願は即ち其の御呼聲なのであります。故に若し此の彌陀佛の御呼聲が無い時は我々は永久に淨

十にゆく可き連絡を絶たれるのである。彌陀佛は實に我々に眞如法身の境を知らせんが爲めに本覺の境より現はれて下されたのであります。で我々は自分では、とても極樂に行かせて貰ふのである。「彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり」とあるも亦茲である、即ち我々は自分では知らぬ間に、「念佛成佛自然なり」で、遂に佛陀の御力で自然の境に屆けて下さるのだといふのです。處が茲が大事である、彌陀佛は自然のやうを知らせんれうであるから、自然を知つた上は、もう彌陀佛は要らぬのであると、若しかく考へたならば非常なる間違であります。夫はどうかと言ふに、我々が自然の境に行く事の出來るのは偏へに彌陀佛の御惠みによつて行く事が出來るのである。若し彌陀佛が居て下さらぬ時には如何に自然の境に行き度く思うても、我々は永久に行く事は叶はぬのである。夫であるから自然の境に行く行かぬは寧ろ第二の問題であつて、要點は唯彌陀に歸する一點に有るのです。而して彌陀に任かせ奉つた上は、自然の境にやるとも遣らぬとも夫は彌陀佛の御計ひである、我々の方に於て兎や角計らふべきでは無い。故に自然の事は餘り言は無い方が善いのである。其處で次には「この道理をこゝろえつるのちには、……」の御誡があるのです。偖て彌陀佛が自然のやうを知らせんとて一如法身の境より現はれて下される有樣は丁度次の樣にも譬へる事が出來る。即ち谷川に導かれて遂に大海に注ぐのを自然法爾の姿とすれば、彌陀佛は其大海の水が蒸發して再び雨となつて我々の上に降つて來たやうなものである。大海の水の儘では如何に美はしくても我々は直接に其水に潤はふ事が出來ぬ。故に之を哀れみて彌陀佛は雨をふらして我々を助け潤ほして下さる、實に廣大の惠みであります。而して此惠みの雨は何かといふに大聖釋尊を初めとして諸佛諸菩薩乃至各宗の祖師方其他我に緣ある凡ての人は皆な是である。是れ實に園林遊戯地門の味である。即ち阿彌陀佛有りと有らゆる姿を現じて人生生死の巷に往來し我々を導いて下さるのである。所謂「彌陀如來如より來生して報應化種々の身を示現したまふ」有樣であります。

次に「この道理をこゝろえつるのちは、この自然のことはつねにさたすべきにあらざるなり、つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことは、なを義のあるべし、これは佛智の不思議にてあるなり。」……偖て斯の如く自然の理はりは何とも言うて見やうなき味はひであるが、併しながら夫が何故であるかは我々には解らぬのである。けれども之は我々に於て彼是れ沙汰すべき事では無い。我々は唯「何事のおはしますかは知らねども忝じけなさに涙こぼるゝ」と、唯其儘頂けば善いのです。然るに之をしかつめらしく見て來た樣にあれ彼れと沙汰するはおて自然の道理が解から無い爲である。沙汰する時は義なきを義とすいふ事も、遂には義のある事になるです。陸に居る者は海の有樣を知る事が出來ぬとおなじく、「如來の智慧海は深厚にして涯底なし、二乘の測り知る處に非ず」である。唯我々は佛の本願に順じて助かる計りである。其已上に佛とはどうかなど。少しでも力み心を起す時は忽ち自然で無くなるのです。而して夫は何故かと言ふに曰く「佛

智の不思議にてあるなり」である。信仰問題凡ての關門は皆この不思議一つで通るのです。誓願不思議名號不思議といふも茲である。要するに他力自力のは唯區別此不思議の一つに有るのです。

親鸞聖人が聖德太子を喜ばれた味も茲で能く頂く事が出來るのです。御存知の通り聖人は太子を喜ぶのあまり澤山の和讃迄も作られた。（和讃は畧す）一體聖人は聖德皇太子をば如何に眺めて居られるのであらうか、聖人の一生に於ては十九歳の時に河內の國磯長の皇太子の御廟へ參詣せられた時が實に信仰問題第一の動機を得られたる時である。又廿九歳の吉水御入信の御時には聖德太子の創立したまへる六角堂の觀世音に參籠して、茲で偉大なる指導を得給ひたのである。其外在家の姿を表して玉日姫を迎ひたるも皇太子の御靈告に基き給ひたのである。されば聖人が斯く迄深く御喜なされたも實に遇然では無い。聖人には太子御自身がはや大菩薩直接の御指導の如く感ぜられたであらう。實に聖德太子は佛の本願を日本に弘めんが爲めに一如法界の境より姿を現はし下された日本の釋尊である。聖人が「和國の敎主聖德皇」と仰せられたは實に難有き適切なる御言葉であると思ひます。

今茲に聖德太子夢殿の觀音の御寫眞が有るから之を諸君に御目にかけます。即ち太子の夢殿に安置せられてあつた像である。實に著しき御姿であります。木の質は楠といふ事で、左右へ衣の端がぴんとはねてあるのは聖德太子時代の式である。聖人が在家の儘信心を喜ばれたもつまり聖德太子の形を追はれたものであります。聖人は其の聖德太子に現に父の如く母の如くに御導きをうけられたのである、度々いふが彌陀如來如より來生して下さるといふが茲の味ひであります。

我々が極樂へ往生する時は還相廻向で再び人生へかへつて來るといふ事を申します、まことにさうである。一旦悟の境界に達した上で、迷へる衆生を見た時は如何しても之等を呼び醒ましまずには居られぬ、其處で今度は衆生化益の爲めに人生へ還つて來るのである。云ふ迄もなく極樂へ行けば、行くなり直ぐ還る事の出來る身と爲て頂くのである。往くと還るとて即ち往還二種の御廻向となるのです。而して聖人は是れ皆佛の御力であると申される。其の御力を聖人は何處で夫程強く御感じなされたかと言ふに、即ち今の如く現に聖德太子なり法然上人の上より事實に於て感じて御出になるのです。御傳鈔には曰はく、

大師聖人、すなはち勢至の化身、太子又、觀音の垂迹なり
このゆゑに、われ二菩薩の引導に順じて、如來の本願をひろむるにあり云云。

之で見ても解かる。又聖人は聖德太子和讃に宣はく

聖德皇のおはれみに、　護持養育たえずして、
如來二種の廻向に、　すゝめいれしめおはします

と。聖德太子が二種の廻向をいつ說かれたかといふに、之は口で說かれたではないが「大慈大悲本誓願、衆生を愍念すること一子の如し」と、太子の一生は凡て身體を以て二種の廻向を說かれてあるのです。

斯くの如く聖德太子の御一生なり、親鸞聖人の御一生なり、諸種の方面より伺つて見れば見る程、彌々佛智の不可思議に

驚歎するより外は無いのである。我々は唯々佛智不可思議と信ずる外は無いのです。處が亦聖德太子和讃には此の佛智不思議といふ事が度び〳〵仰せられてあるのである。曰く

佛智不思議の誓願を、　聖德皇のめぐみにて、
正定聚に歸入して、　補處の彌勒のごとくなり。

聖德皇のあはれみて、　佛智不思議の誓願に、
すゝめいれしめたまひてぞ、住正定聚の身となれる。

久遠劫よりこの世まで、　あはれみましますしるしには
佛智不思議につけしめて、　善惡淨穢もなかりけり。

處が丁度此の反對に佛智不思議を疑がふ方面を御擧げなされたが皇太子和讃の直く前なる疑惑和讃であります。他力に於て疑がふと云へば結局佛智不思議を疑がつて居るのである。自ら勵みて念佛を唱へるのは佛智の不思議を信ぜぬからである。自ら少しでも善を行じ度いと力むは、未だ佛智不思議の救濟を信じて居ぬからであります。去りながら最後に此等疑惑の人々は如何になるかと言ふに、此等の人も亦遂には自然の御力で佛智不思議に轉入させて下さるのである。即ち始めにも申した「定散自力の稱名は、果遂の願に歸してこそ、敎えざれども自然に、眞如の門に轉入する」であります。

其處で之を要するに全然佛智の不思議といふより外は無いのであります。處がも一つ進んで言ふ時は、全體こんな事を知つた顏して言ふ事が抑も譯の解らぬ話なのである。故に聖人は直ぐに其後に懺悔をして『よしあしの文字をもしらぬ人はみな、まことのこゝろなりける哉、善惡の字しりかほは、おほそらごとのかたちなり』「是非しらぬ邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。」かくいふ親鸞が物知り顏に自然法爾の話をしたり爲て居る事は實に勿體ない、この親鸞は實に小慈小悲も無きものである、是非邪正の區別もつかぬ淺間しき者である。然るに其の分際を以て猶ほも名利の念からして師匠ぶつて見度がつてるのである、實に申譯の無い事であると、痛切なる懺悔をせられたのであります。猶ほ「愚禿悲歎述懷和讃」の中には丁度此に相對する和讃が二首程ある。

無慚無愧のこの身にて、　まことの心はなけれども、
彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ。

小慈小悲もなき身にて、　有情利益はおもふまじ。
如來の願船いまさずば、　苦海をいかでか渡るべき。

是非善惡に抗泥しておほそらごとをやつて居ながら、猶ほ無慚無愧に暮して居る淺間しき我々なれども、彌陀廻向の御名なればと玆に絕對を仰がせて貰ふ、實に難有き限りであります。

偖て以上に於て自然法爾法語の大略を申上げました。私如きが一角心得顏して御話致したも、實は小慈小悲も無き身にて、名利に人師を好んで居る譯である。實にとんでもない勿體なき次第であります(已上)

憶念

（求道學會日曜講話）

近角常觀

今日は恰も宇羅盆に當ります、此宇羅盆の紀元につきては御承知の通り大聖釋尊の許に多くの弟子があつまりて毎夏雨安居といつて雨の時節中安居し、安居終りし最後日に目連尊者が母の爲に大衆を供養せられたにつきて起りました。アヽ今日佛の時代の敎團の樣を思ふと云ふべからざる淸新の感をもちます、御存じの通り印度には雨の降る時に佛は諸方へ遊行をやめなさる、何とならば、靑々とした多くの草が生へて居る、これを蹈む、又多くの虫を蹈み殺す、のみならず大雨にてもつてる器物等を流す恐れがある、されはかく遊行を止め、一處に止まりて法を說く之を安居といふ、今日にて思ふと丁度夏季講習會をするとよく相當して居ます、丁度夏休暇が初まつて皆勉强もやめになつたとき各修養の爲に一所にあつまり夏期講習會をひらいて修養する。佛はかく年に一度說法をなされます、されば後には佛の成道より一年二年と勘定するに安居を每年かゝさずする故に佛安居の何年目といふ樣に計算した、

今日は休暇前の講話なれば、丁度夏の修養につきてたとへ佛のなされたとほりは出來ぬが佛の昔を忍ぶことは夏期修養に最も適當であらう、

ビルマ佛典中にあるが、佛は安居中未明に起きられ、今日化益せんとおもひたまふ人の方へ向つて行かれ、托鉢の後大衆を集めて說法をなさる、大衆是を聞きて林の間を逍遙して自ら實觀實修する、或は互に問答したりする、晝飯以後は又一度佛より得た處を繰り返し、是より諸方林の間を步行する、晚に佛は諸天善人の爲に法を說き給ふ、我々て云ふならば家庭友人寄り集まつて法を喜こぶ樣なものであらふか、夫から眠りにつくとある、されば今日の如き宇羅盆會にありては少なくとも早朝一家一族あつまりて佛前に禮をあげ先祖をまつり、修養を忘れず一日を全ふして眠につくといふものです、

私も今日より地方に傳道する積であるが、何率行先先で法を喜び集まる人々に快く話したいものである、今日は橫須賀へ行き、もし汽車が通じたならば京都へ行かんと思ひます、そこに五日間廣島、播州、神戸、江州歸省、越中、飛驒、信濃、飯山(こゝは五年ほども續けて行く)越後の水原、三條、柏崎等を經て九月の十五日頃歸京のはづ、土曜の講話には是非間にあふ樣にいたしたいと思ひます、二ヶ月間かく各地で佛の御慈悲を喜こばしていたゞけるは實にありがたい、たとへ佛の夏期雨安居に於て行はれた樣に出來ずともせめては夏期中に於ての佛の御樣子を忍び修養したいものです、

進んで安居の最後日は七月の十五日である、そして宇羅盆は其最後日に舍利弗、目連の二人の最も勝れた著るしき弟子があつたが舍利弗は智慧第一、目連は神通第一であつた、されば目連は其日に禪定にいつて其母は今何處に在るかを觀じたら地獄でも最も淺ましき餓鬼道に落ちて居るといふ事を發見した、大に驚ろいて如何にしたら救ふ事が出來樣かと非

常に心配した、佛に問ひ奉つたら、佛は自恣の日（安居の終りし日を自ら恣にする即ち自由な日といふ意味）に、ありとあらゆる大衆を供養して三寶に歸せば可ならんといはれた、されば目連は大衆を供養して三寶に歸して母を救ふ事が出來た、これが宇羅盆の紀元である、是が支那に渡りて施餓鬼の樣なものになり、日本にも傳來して盆となつたのである、日本の儀式中彼岸と宇羅盆とは祖先をまつる聖日となつてるが彼岸は日本にのみあつて支那にはない樣であるが、此宇羅盆斗りは印度からの古式である、聖德太子の傳に「七月十五日に齋を設けよ」とある、歴史的に考へても此宇羅盆といふは非常に意味が深い、大目連が母の爲に大衆を供養したのが元となつて日本でも先祖を供養し、親の墓へ詣でる樣になつた、今日も此最後の講話の日に此講話をするのは嬉しい事である。

此宇羅盆は各宗でもするが、先づ眞宗に於て之を行ふ心持は如何かといふ事について話しませう。普通に此先祖を祭るといふこと又供養するといふ事は其まつりたり、供養したりする功德でもつて先祖を救ふ事が出來るといふ樣に思つて居る、即ち我々が經を讀み供養をする事に非常に力が入つてる樣である、親鸞聖人は少し違ひます、抑も聖人が盆に限らず一般の人の考とは大層違つて居る點は他の宗では一遍の經一遍の供養皆自身の功力が元になつてる樣だが、聖人はそうでない何故かといふに我々自分自身が何等の力もなく又何等の勳もない、故に自身で人を救ふ事は決して出來ぬ、又自分自身ですら自らの力で救ふ事が出來ぬゆへ唯此南無阿彌陀佛で救はれるといふ事が元である、

たゞ御經其自身の力、念佛其自身の力で救ふ事が出來るといへるかもしれぬ、自分が經をよんだ爲でなく廣大な法の力て親も祖先すくわれる、たゞ法が廣大なのである、目連が親を救ふ事の出來たのは目連が供養した功德よりも其供養を受けた大衆僧侶の功德である、大本に歸つていへは其佛の力である、偉大なる佛法僧の三寶の力で助かるのである、親鸞聖人が親鸞は父母の孝養の爲とて一遍にても念佛申したる事いまださふらはず、其故は一切の衆生はみなもて世々生々の父母兄弟なりいづれも此順次生に佛になりてたすけ候へきなり、我力にてはげむ念佛にてさうらはゞこそ念佛を廻向して父母をもたすけさふらはめ云々と申されてある。

三寶の力を仰ぐ斗りて我としては些の力もない、神通方便をもつて有緣を度すべきなり、親も我も皆佛に共に救はれるのみである、世々生々の父母、兄弟友人一切みな佛にやがて成つて救はれるのである、

宇羅盆に限らず平生經讀むのも念佛するのも皆佛の力を仰ぐ斗りである、聖人は或時佛子が師に背いて行つてしまつた時他の弟子が彼にやられた御名のかいてある御聖敎をとりかへされたらよからんと申されたら、聖人は聖敎は如來の流通物である、私のものでない されぱもし彼が彼經を山野に捨てゝも其處の有情が皆成佛の緣を結ぶてあらうといはれた、即ち經に全く佛力を認めて居られたのである、又鎌倉時代に北條時頼の父修理亮時氏政が一切經を書寫されたとき、これを校合のために多くの僧侶方を招待して御馳走をなされた、其時に聖人亦行かれました、其時御馳走は魚類等であつた、で僧

侶方は皆袈裟をぬがれて食されたが聖人のみは袈裟を着した儘に食された、其時時頼が幼年ながら御給仕に出て居たが、大層不思議に思ふて如何いふ譯かと問はれた、處が親鸞聖人は他の方はいつでも斯樣な御馳走をめし上る故ちやんと袈裟をぬいで食しなさるのであるが、此善信は此樣な御馳走は始めてなればあまり急いでたべたのでぬゞを忘れましたと答へられた、けれども時頼は幼年ながら不思議におもはれ、あとで又きかれました、聖人はもはやのがれかたなくていはれる樣、稀に人身を受けて居りながら此樣に魚類を喰ふて生類の命を亡ぼすは實にあさましい次第である、けれども末法濁世の當時の衆生は皆破戒である故保つ人がない、されどもありがたいことには袈裟をかけて居るによりてもし此まゝて食したら此袈裟衣の功德で此あしき者に食された魚も成佛するかとおもふて袈裟衣をかけたまゝ食した次第である、まことに世間のひとのそしりをもかまはずかくいたすは、まことにあつかましいことなれどもたゞ冥衆の照覽をあふぎて此樣にいたしたのだといはれました、

世間では眞宗とは此樣だといふ風に別になつてあるが然らず、親鸞聖人に於て念佛袈裟等は佛の御力より他に毫もないのであります、我が如何したとかこうしたとか此方でするのではないのである、佛の御力南無阿彌陀佛南無法南無僧の功德の他はない。つまり南無阿彌陀佛一つに歸するのである、我々の信仰の上からいへば佛の御惠により我等は一切衆生が救はれるといふのである故に盆の行でも我等平生の行でも皆感謝である、報謝である、

してみれば盆の如きも目連尊者が母を救はん爲の營をした如く、我等もありとあらゆる人の紀念の爲とでもいはふか、先祖以來の御恩を想起し而も佛陀の御恩報謝を特に忘れずする樣にせねばならぬ、

親の墓へ參るにも親が浮ふ樣に思ふてまゐるのではなく、たゞ如來大悲の恩德を謝し奉る心持でまゐらねばならぬ、それを何處か其處いら邊に迷ふてる生靈を救ふ樣な心地でやつたらちがふ。

たゞ佛の恩で救ふてもらへるのである、されば此盆には特に佛に對しての御恩を感謝せねばなりませぬ、故に何も彼の複雜なことは入りませぬ、たゞ彌陀一佛が我々先祖をはじめ、あらゆる有情を救ふて下さる恩德を謝し奉らねばならぬ。盆につきては此位にして今日の題の憶念といふ事につき話しませう。

憶念といふは一度佛のめぐみて到り屆いた以上は其ありがたいことを忘れられぬが憶念である、

如何となれば我々の信仰は自分自分の計らひ心の上に佛を一時形づくり、描き出して信心とする樣であるが、これは誤である實に危險である、何故ならば影のようつてる間だけが信心と云ふならば水上に描いた樣なもので信でも何でもない、

我等の立場は凡夫の立場である、世の中には先から先まで見通して至極敏捷にやつて居る人もあるが、それでかへつて大にやりぞこなつてる人がある、自分の考を元にして横着になつて遣つてる人もあるけれども例へどの樣に賢こくとも人間の考は一切だめである、

信仰といふことは我々いろ〳〵考へていたが、佛をきいてありがたくなつたと自分の考の上に佛をのせておくのではない、これまで佛の慈悲をしらなんだが成程ありがたい、實に貴いと氣づいたのだ、丁度闇に光のさしこんできた樣なもの、一點さしこめば闇は忽ち光となるのである、其通り一旦佛に氣づかして戴けば心配、苦勞、悲嘆等實に苦の世界であつたが、あゝ氣づいてみればありがたいことである、此處に佛樣がゐて下さつたと一念氣附いた處が一念、氣附いた上ははや世間の立場に非ずして佛の立場である、

サテ此憶念といふ事は此ありがたい一念を記憶しようとするのではない、此一念を忘れんとしても忘れる事が出來ぬ味である、全く我のいらぬ計らひの去つた處である、世間の事のみおもふて心を惱ましてるはつまらぬ計である、唯佛の御慈悲がありがたいともう疑ふと思ふても思はれぬ處である。

此憶念の人は一見頗る愚人の如してあらう、けれども一度光を認めた上は其光を消す事は出來ぬ、雨が降らうが震雷砲裂の中でも、氣附いた上は決して忘れぬ、念といへる文字はどうでもいへる文字で觀念ともいふてある、しかし佛を觀念する事が出來れば我々が佛を觀念する時は觀念に非ずして妄念である、我計らひである、されば稱念といひて佛名を稱するのである、けれども唱へる出來るといふは心に憶念があるからである、此憶念はとりけさんとおもふても取消す事が出來ぬ、モ一ついへば我心くつがへりて佛の光明入り、消えぬ處が憶念である彌陀佛の本願と云ふと我等を救はふとする佛の親心これを喜ぶ計りである、

何で人が絶對の信に入る事が出來ぬかと云ふに、先に云ふた通り皆形づくり描き出したものなればすぐ消えてしまふのである、憶念とは親に出逢ひて「偖て〳〵今迄永い間迷ふてきましたとすつかり今迄の自分が捨つてしまふて佛のめぐみならではニッチもサッチも行かぬ處で、あゝ大慈悲の御親の恩惠ありときくなり、此佛あり、あゝ貴いと、今迄の上につけておくてはないサラリと捨つて人生唯佛のめぐみのみ貴いと喜ふのである、かく感ずるのでない、全く根本的にひつくりかへつて佛が立場となるのである、力んでやるのではない、おのづから氣をつけさしていたゞくのである、今迄は間違つたと氣附くのである、まちがつて居たと思ふのではないぞ、たゞ實に佛のめぐみをしらなんだと、其時は佛のめぐみ斗りになる、其以外に人世はみえない、佛のめぐみなればこそ專修であり、專念である、考へてみれば釋迦彌陀二尊の御導によりてみな導びいて下された惠の以外に何物もないと親のめぐみの中に入れてもらふのが信心である、自分の心をそのまゝにしておいて信は得られぬ、心を翻す事が肝要である、これはひとりでは翻す事は出來ぬ、例へば自分の座を自分で動かさうとする事は出來ぬが他より力が來るもの故全くくつがへす事が出來るのである、今迄本願をないがしろまにし、背いて居たのは實に物體ないと一寸思ふではない、腹底から佛に懺悔し奉るのである、

一念とは信樂開發の時刻の極促をあらはす其時開發した以上決して消える事はない。

他念とは如何我々は佛の立場に入つても凡夫なれば煩惱も

起す、けれども又忽ち雲去つて佛日を見奉る事が出來る如何に表面で荒るゝとも佛心を戴ける故に決して立場を失ふ事なし

彌陀佛の本願を憶念すれば即の時必定に入る、此憶念と云ふことは何故あるかといふに佛が常に憶念して絶えぬ故、私等も信心が絶えぬのである、

親が子を思ふ事は昨今ではない、昔より絶へた事はない故親のめぐみを感じたと同時に忘れる事が出來ぬのである、

御經にも彌陀の十方の衆生をおもふ事は親の一子を思ふ樣だとある、又大論にはたとへば魚母の子を思はざれは其子は腐つてしまふ、とある、魚母が念じてる故に子が孵化するのである、其の如く、母の子を思ふ樣に佛は我等を決してわすれたまはぬ是が佛の憶念である、此佛の憶念を氣附いた處が信仰である、

アゝつく〳〵思へば永劫の修行とか五劫の思惟とかいふ事は佛の親心をもつて我々を念々思ふて下される慈悲の相である、此事を氣づかしていたゞいたのが信心、信心した上は憶念の心常にして佛恩報ずる思ひありてある、丁度或水源から筧を通した樣なもので、無限の水源の水はたへず私の處へ通じて絶える事はない如くである、「佛恩報ずるおもひあり」されば こそ又いかに煩惱に覆はるゝとも其下からあゝありがたい南無阿彌陀佛、申譯がないと悲しさにつけ、よさにつけ、御恩を報ずる思があるのである、水に描いた信心はなんの役にもなら無いが御恩を眞から喜こんた上の信心はたゞよく彌陀大悲の恩を報ずへしと自然に報謝のおもひがでてくるのである、

モー極なき佛のめぐみをよろこばしてもらふのである幾度もいふが覺へ樣として覺えてるのではない忘れんとして忘れられぬ味である、

彌陀の名號稱へつゝ　　信心まことにうるひとは
憶念の信常にして　　佛恩報ずるおもひあり

親鸞に於てはたゞ彌陀に助けられまゐらすべしとよきひとの仰せを蒙りて信ずるほかに別の仔細なきなり云々の如くたゞ仰せ通りをよろこんでる斗りであると聖人は云ふて居られる、故に彌陀の名號稱へつゝ信心まことに得るひとはといはれたのである、

今の人は信じたとまではよくいふが何を信じたのだか薩張りわからぬ。

「彌陀に助けられまゐらすべし」との仰せどほりを信ずるのである、善導大師が此念佛成佛即ち念佛して佛になるといはれたが此念佛してたゞ一心佛に歸命する事が眼目である、たゞ專らに佛の御名を稱へて常に事にふれ佛恩を喜こふが憶念である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

せみの聲たはとやみて冷風の
梢かばらふ音しづかなり

告白

遂に他力に入る

岩井　三子

此度先生より信仰告白を致す樣仰被下ました故不取敢申上ます私は昨年十月夢中の有樣て信仰に入りました其動機は私は幼少の時からまことに物を憐む性質て御座りまして其心を以て眞實人を世話致しましたが、いかに私しがひとを思ひましても先方が少しも思つて呉れぬと云ふ樣に成りましてつく〳〵人生がいやになり死にたくなりました。此以前とてもずいぶんひどい困難や不實の人に遭遇致し煩悶致しました事も澤山御座りましたがいつも古歌を案しましたり淘宮術のおかげによりまして忍耐して時を經れば段々煩悶もうすらぐと云ふ如き習慣て過しました。けれども昨年のは不思議に其如く堪へられませんてもう此世に在るのが一日一時もいやになりましてどうして死なうかと迄思ひつめました、するとどうも佛樣の御たすけがある樣な氣がいたしましたから今西龍樣は禪學を御修養あそばさるゝ事を承つて居りました故御宅を度々うかがひましたが御留守て御座りまして御門を開きませぬのでよぎなく歸宅は致しました、併し居ても起つても居られませぬのて深夜ては御座りましたが阿部維嚴樣の御門を叩き情實を御打明申て御同君の御紹介を得まして先生の許へまるりました。種々御話しを伺ひ御著書拜見致しまして佛樣の御慈悲を段々明らかに氣をつかせて頂きました實に現在と昨年今日迄とを照し見ますと天地が轉倒した有樣て御座ります、昨年の變動は私の爲めに佛樣が御慈悲をきづかすとての御手廻して御座りましたることと信じます求道第二卷第五號人格の淘冶に吾人は飽くまても困難に當り人生を經驗し煩悶苦惱あらゆる風雨と戰て遂に人間を理解し社會を達觀し最後に自覺の境に達し絶對の地盤を見出すに在りと御記載相成たる如くの順序にて信仰を得ましたる事と自ら信して喜ひます實に罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けん爲めに吾々の上に直接佛樣の在らせらるゝ事を少しも心付かず淺ましく自身も煩悶し他人をも苦しめたる此罪惡なる私を御本願力御相續心を以て遂に御手のうちに御救ひ上げ下され給ひましたるは實に只々感泣の外御座りませぬ

金剛堅固の信心は
佛の相續より來る
他力の法便なくしては
いかてか決定心を得ん
南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

嘆詠

娑羅双樹

左千夫

五月雨に君思ひ居れば君か家の忌森高森青葉せる見ゆ

夏休み家戀ひくれば坂に出てゝ家のもり見ゆわがいへの森

ふるさとの吾家の森は楠若椎の若葉に我れ待てりけり

父も母も早苗に出てゝ椎森のたひろき家に留守居するかも

ものさびし青葉の宿の五月雨に室にかなへる娑羅雙樹の花

夕の感

甚

夕靜かに我か衣を
一つ一つに脫きゆけば。
來し方或は行く方へと
我を誘ふ愛き思。

昔思へばわが母の
衣脫かしめし日もありき、
我れ搖籃に乘せられつ、
外吹く風を聞きたりき。

臨終思へば隣人に
かくせらるべき時あらむ、
靜かに地に埋められて
さて我れ長にやすらはむ。

睡に眼閉づる時、
かくぞ屢我れ夢む、
彼れと此れとは異ならじ、
其は何故と知らねども。(Hebbel.)

さみだれの頃

厳　眞

はちす葉のさやけき見れば露だにもそのにごれるは障らざりけり

さみだれの日のくるらくにおぼろかに吾おぞを知るこの夕かも

さみだれの日のくるらくにうらさびて悲み居れば見ゆる燈

さみだれの日のくるらくに忽ちに驟げる風の心どもなし

さみだれのおほにこもれる下こゝろ蓮は清き花含む（フ）らし

甲州行

志都兒

六月廿三日甲斐に走り惠林寺々畔に友垣なおとづれ相携へて惠林寺山に遊ぶ

甲斐なるや松里村に友訪ひて惠林寺山に苺食ひけり

下草のしげみをいわけあへぎ來ししるしゃあれか苺赤玉

惠林寺の山を遶らす畑なみの穂麥がくりに人らうたへり

阿志比木乃尾の上に出でゝ黄金なす四方の麥畑見らくたぬしも

こゝにして見るや國原目の限り見ゆる限りは麥畠なりけり

天つ日のてりのよろしく見放るや廣ら麥畑秋半なり

河鹿鳴く笛吹川邊みどりしみ岸の栗原花咲き滿てり

笛吹の岸の栗原花咲きてみどりが上はたゞ白く見ゆ

おほよそに見そくし難き栗林花の盛りを人ら言はずも

久壁の夕立雲は恐ろしく栗の花原襲ひ迫れり

垂花の栗の花房咲く頃をこの里しげく雨は降るちふ

おほしけき曇のごひて日かゞやき見る目もさやに栗の花原

咲きつゞく栗の花原見てあれば松のこぬれにかなくの鳴く

時報

九州傳道日記

○五月十六日

曉山陽鐵道列車に窘めて馬關海峽を渡れば有田廣君既に門司に來りて海岸に待受けらる、事のあまりに意外なるに何より言ひ出でんと互に感極まりて却て言ふ所を知らず。

抑〻この度、九州傳道の途に上りし最近の動機は全く同君の德愚によりてなり、これより先き予の江州にあるとき九州の有志諸君より招きを受けたれど、既に四國に多くの時日を費したるを以て引續きて九州に往かんにはあまりに長くなる虞あるゆへ、此秋まで延ばさんと欲せしに有田君より手紙來りて言ふやう我叔父の愛子を失ひて求道の志頗る切なるものあり、加之ならず我郷に諸の逆緣によりて法に入れる人多くまた福岡大學に佛教青年會の組織せられ正に發會式を行はるべし、必ず來たられたしと予此書を受取りては此秋までとは言ひ難し、これ如來の御命なりとかこしこみて動靜出沒、仰せのまに〳〵九州傳道の途に上りたり、かくて同君の迎を受く、豈感なからんや

同君は予が昨年熊本にゆきたるとき態々福岡より來りて三日間聽講したまひし也、列車中にて詳かに同君半生の經歷をきゝ、特に入信の順序と同君が入信を一點火として同郷に信仰勃興せし事實を聽き佛智不思議の大なるに驚き且つ嘆じぬ、且つ同君は固ゝ予を其家に迎へたまふ意なりしも日數少きために全く福岡に讓りて父君、母君、叔父君、夫人、令弟、令妹、嬰兒に至るまで一家は勿論友人皆帥ゐて來聽したまひ久留米の終りまで伴ひたまへり、洵に九州傳道の東道の主人なり感謝かぎりなし、唯老母の盲になりたまへるが遇はれぬをいと口惜しがりたまふときゝて今も思ひ出して胸つぶるゝ心地す、

福岡に着す、福岡大學青年會の人々及び萬行寺の信徒の人々に迎へられて特に信仰家の宅に泊宿せしめらる、丁重言はむかたなく、中心より敬愛を受く、さて來着して詳しく事の仔細をきくに有田君と青年會と深く交渉なかりしも偶然にも皆自然落合ふてかく好都合となりしといふ、抑〻今回福岡大學の青年會の起るや洵に不可思議なり、本年四月大學生小室直幸君東上して求道學舍を訪はる、談話の序でに曰く、久保教授は予が最親の學友にて且つ　德風會にも出席したまへり、と、君福岡に歸り直に久保教授の賛助を得、校内の有志を募る、直にして七十人を得、又教授助手等入會せらるゝもの十數人たちどころに有力なる佛教青年會成る、これ此會の起る所以にして此月十九日即ち舊曆釋尊降誕の聖日を以て發會式を擧行することに決せり、而して恰も予此時福岡に向ふ、偶然なるが如くにして而も偶然に非ず、事全く神秘に屬す、

博多萬行寺は近代信仰界の北斗故七里恒順師が多年教化したまひし遺跡、其感化力の偉大なる今に信徒身を顧みず、法の爲に盡瘁せらる、しかるに從來福岡大學内部に基督教青年會ありて未だ佛教青年會なし、此に於てや私かに之が設立を

待つこと大旱の雲霓を望むが如くありき、しかるに今や其勃興を見る、欣舞して之を歡迎するの狀いかにも尊し、ひとへにこれ故七里和尚の賜にして佛天の廣大なる御計ひに基くこと一點の疑なし、

この日筑紫女學校に於て一場の講話を爲す、校長は水月哲英君なり、君は予の同學にして共に青年會寄宿に在り、君米國傳道に從事し、頗る功績多し、不幸にして中道にして病を得、志を空くして歸朝し、遂に身體の自由を失ふ、而して久しく君と相會せず、此に君に見へんとす、轉〻感慨に堪へず、私かに君が現狀を想像して悲喜交々到る、車にて君が校に至る、帷幄を隔てゝ遙に君の校内の外に迎へたまへるを見る、左右に丁字形の杖を以て身を支へ、怡々たる態度を以てさも歡ばしげに佇みたまふ、予車より飛び下らんとすれば君片手を擧げて會釋して之を止め、身を輕く杖もて飛ばしつゝ入り見えたまふ、互に手を採りて言ふ所を知らず、いかにも君が滿足して一點の曇もなきために予が胸にせまりし悲哀の情を融かして、幸に涙は喜の涙となり了りぬ、同校は本年四月認可せられて高等女學校となれるもの、生校いかにもゆるやかにして齷齪として羈絆拘束せらるゝの虞なきはいと愉快なる感を與へたりき。

この夜萬行寺に於て講話をなす、予不幸にして七里和上の生前に見ゆるを得ず、去る三十三年九州を巡回したるときは恰も和上入滅の翌年にてありき、今や和上一代教化したまひし道場におきて和上が一代口を絶たざりし念佛を說く、滿堂の聽衆老若男女の區別なく一齊に念佛す聲堂に震ふ到る處に感化力を見る、

○十七日

朝東公園に久保猪之吉兄を訪ふ、老松槎枒として枝を交ゆるの間に清新の住宅あり、一家團欒往を懷ひ來を談ず、予の高等學校及大學に在るとき君と共に駒込櫻觀音に寓し、三年間君は泉流を汲み我は薪を拾ふの生活を爲したりき、我青年會の寄宿に入るべき義務の爲に居を別にせざるべからざるに到りぬ、特に予が非常の苦悶を抱きて松島講習會より歸れるときの如き相顧みて茫として言ふ所を知らず、今にして之を回想す、人生洵に一夢なり、予が西航の間、君我弟を敎へ、君が航西の間は君が弟君予が學舍に在り、君今歸朝して此に敎授の任を帶びて青年會を開き、我今發會式に臨みて君が家庭を訪ふ、佛天の善巧洵に人智の測るべきにあらず、君予に贈るに羅馬ベストルの神に捧げし燈とピサ斜塔の小型を以てす紀念として今に座側に在り、君と散歩して白沙青松の間を逍遙す、龜山天皇日蓮上人の肖像、天寇紀念館、箱崎天滿宮一として當年を回想するの跡たらざるなし

午後中學校獻修館につきて講話を爲す、結構完備せること中學として恐くば全國の最たるべし、校長及敎授舍監等の諸君寄宿及校内各所を案内して視察せしむ、剛柔の德につきて詳かに講話す、結局信念を根底とすべきを說く、生徒非常の熱心を以て之を聞く、

歸路西公園に登臨して玄海の波を望み、長風に嘯きて宿に歸れば求道者室に滿つ、大悲の惠みを說く有田叔父君を初めとして同地小學敎師衆て求道に熱心なり、しかも其信心洵に

固し、皆是嘗て宗敎に冷淡なりし人々、何れも有田君の誘導によるもの、嗚呼各地の小學敎師諸君決して口に宗敎を談ずるなくとも心に信念を抱きて兒童が人格を作るべく導かれたきものなり、

夜萬行寺に於きて特に大學々生と當地青年團體の爲に予か信仰に入りたる實驗談を爲す、予は實に青年諸君の友なり、青年諸君の正に求めつゝある處が予が恰も經驗したる所、いつも予が經驗を語るとき常に此感なくんはあらず、

○十八日

高等女學校に於て福岡市敎育會の爲に一場の講話を爲す、日本思想界の發達につきて語り、信念の必要なるを說く、同地小學敎師福江君の求道心を起したる此時なり、

夜公會堂に於て福岡大學學友會の公開演說あり、久保敎授「趣味」につきて述べらる、特に詩的の趣味につきて詳說し、東西趣味の異同を辨じて東洋趣味につきて氣燄を吐く、加藤弘之博士醫學の進步につきて所感を述ぶと題して、舊幕時代漢法醫の狀況を敍し現代の進步に及び隔世の感あらしむ、博士一代學界の泰斗として後進を誘導し、人格益々老熟して篤學人の師表たり、予は宗敎的經驗を敍して詳かに見神の實驗若くは無我の愛の如き現代自覺問題につきて講話す、

○十九日

本日正に陰曆四月八日にして釋尊降誕の聖日に當る、公會堂に於て福岡大學佛敎青年會の發會式を行はる、縣知事の祝辭、久保敎授の祝辭演說、熊本高等學校佛敎會の代表者各地よりの祝電祝辭、少女の降誕奉祝の唱歌等あり、啓白文の朗讀を終りて講話あり、日宗某師の予か國家觀、聖福寺和尚の誕生讃につきての提唱あり、いかにもありがたし、現に大聖のみもとに跪けるの想あり、我自覺と題して釋尊出家入山降魔成道の實驗をのべて青年求道者の正に跡づくへき道なることを述ぶ、一同庭前に撮影し、筑前琵琶の餘興あり。

夜、特に萬行寺信徒の希望によりて同しく公會堂に講話をなす、絶對他力の大道如來大悲の本願を說きて不斷煩惱得涅槃の醍醐味を味ふ、我も人も共に大慈の光明に融かさる、つゝしみて四日間福岡におきて各方面に於て結緣せしめたまへる佛天の冥祐を感謝したてまつる同地に於ける某君名を言はず唯基督敎徒に自告して個人的の滿心の感謝を捧げて去らる、予深く心に彫む、何ぞ知らむ恐くは是れ東京に於ける眞田君京都に於ける無漏田君の舊友にあらざるなきを知らむ、恐くは慈悲の父母種々に善巧方便して君が無上の信心を發起せしめたまふに外ならざらむ一樹の蔭一堂の會、宿緣淺からず、南無阿彌陀佛。

○二十日

朝將に福岡を辭せんとして萬行寺七里恒順師の墓前に詣づ、停車場に水月君丁字杖に支へられて見送りたまひ、久保君走り來りて熱き握手を以て別る、七里師初め萬行寺信徒諸氏懇に送らる、有田君一家、小室君初め青年會の人々、熊本高等學校の諸君宿の主人等十有餘人相携へて乘車し道に大宰府に詣づ、道に井上博士の菩提寺の前を過ぐ、大宰府に着して當年配所の月を想ふ、遙かに天拜山を望みて菅公野に晏天に號泣したまひし心を懷ふ、都府樓の荒墟を見て當年外交の盛時をお

もひ、觀音寺に詣して聖像の下に跪きて深く靈威を感ず、特に戒壇院を拜して當時の佛敎を回憶せずんばあらず、再ひ乘車して久留米に着す、

久留米に於ては三日間歎異鈔を講本として他力信仰の眞髓を語る、毎日午後二席の講話をなす、初の一席に實驗を說きて、後の一席に詳かに聖語につきて大悲を仰ぐ、

夜演說會を開きて特に歎異鈔第二章につきて聖人の信を說く

○二十一日

宿寺の母堂病あり、乃ち枕上につきて大悲を仰ぐ、泣きて大悲の恩德を喜びたまふ、午前福岡分監に於て一場の講話を爲す、吏員囚人共に大に喜ばる、午後講話あること前日の如し、夜月明に乘して高山彦九郎の墓に詣づ、老樹陰暗ふして月色凄涼たり、草野君の寺を訪ふ、君は三十三年九州巡回の時東道の主人たり、家庭及び有志の人々に信仰座談を爲す、

○二十二日

崇谷嗣道君の寺を訪ふ、今回の行實に君の嚮導による、弟君久しく病床に在り、就きて大悲の恩寵を說く、弟君横濱監獄の敎誨師たり、大に滿足して光明界中に喜ばる、將に辭し去らむとす、楣間掲くる大德寺一如禪師の書あり、君予か賞讃措かざりしかば即座に與へらる、君は嘗て京都に遊びし時相識る所、且つ福岡分監に多年敎誨を囑托せらる、

直に高等女學校に於て敎育會講話を爲す、前市長久留米の氣風進取の勢少きを慨して、之を鼓舞せんことを需めらる、乃ち知進守退と題して、福岡と久留米とを比較して守退のものは亦大に進むを知らざるべからざるを說く、午後講話を爲し夜他の宿寺に於て公開演說を開きて歎異鈔結文につき信仰を說く、此地從來、風俗敦厚にして質撲の風あり、其物產久留米絣之を證して餘あり。故に信仰の如きも頗る敦し、唯憾らくは多くは守舊に流れて未た新なる氣運を引起すなし、蓋し青年の信仰起り來らば將來大に望あらむ、

○二十三日

宿寺母堂を訪らひて久留米を出立す、有田君及ひ夫人令妹、崇谷君草野君前市長等と停車場に分れ、熊本より來たまへる君と信仰を語りつゝ知らぬ間に熊本の停車場に着しぬ、

熊本第五高等學校青年會の人々幷に野田諦聽君福山正登君今川夫人等擧て迎へらる、研屋支店に宿泊す、熊本にては三日間自然法爾章を講本として講話する計畫なり第一日は坪井方面に於て開會す、即ち大友氏の寺に於て二席の講話を爲す聽衆何れも眞面目なり、

夜青年會の會場に於て會員の爲に信仰談話會と爲す、何れも胸臆を披瀝して信仰を告白し、道を求めらる、

○二十四日

午前佛敎婦人會に於て親鸞聖人の信仰及家庭につきて講話す眞面目にして靄らかなる類なし、午後縣會議事堂に於て同じく自然法爾章につきて講話す、青年學生、官吏等文字ある人々堂に滿つ、從來純粹の信仰講話は少人數に對してなす習慣にして多人數の人に對しては人をして實驗信仰に入らしむるために人生につきて語るを主とせり、しかるに熊本は昨年の秋一度遊びて既に十分之を話せり、本年は一層信仰の蘊奧を說

くにあらずんば其所詮少かるべし、此に於てや講本を印刷して公開の公堂に於て純信仰の講話を試みたり、而して十分に目的を達するを得たり、從來求道學舍の講話の如き所謂少數人の會合なるもの、若し之を大なる會館に施し得るやの疑ありき、而して今や全く其期する所を實現し得べきことを確信するを得たり、

昨年予の熊本高等學校佛敎青年會に來れるとき有志諸氏の間に自炊寄宿寮を設置せんとする志ありき、予いたく之を慫慂せり今や既に成立して、其中樞の人々合同生活せり、赤松君、猪股君、安藤君、有田君、及福岡に迎ひたまひし君の五人也、家白川に臨む、名けて白川洞といふ、演說後今川覺神師及び野田君と共に洞に請せられ、紀念の爲に撮影せらる、白川の流淸ふして、肥州薩州の連山指顧の間に在り、我同朋共に如來の愛子として柴門曉出霜如雪、君汲泉流我拾薪の理想を實現するもの、淸新言はむ方なし、深く大悲の冥護を仰ぐ、而して同朋諸君は靑年會の爲に倶樂部を設置するの志ありて昨秋已後、課餘各地に演說し、音樂會を開き、過半其計畫成る、信ずるものは必ず成る、佛力不可思議也、

夜高等學校龍南會に於て現代の思潮につきて一場の講話を爲す、乃ち奮鬪主義と理想主義とが現時學生界否社會全體等ろ世界全般の思潮なり、而して何れも信仰に入るにあらざれば絕對の地盤と絕對の滿足を得べからざることを述ぶ、

○二十五日

久留米已來、熱心なる一人あり、常に余に伴ふて深く喜ばる、乃ち相會して語る、大內君にして君が兄君暢三氏は第二回夏期講習會の時共に鎌倉に遊びし所、相名のるに及び宿緣不可思議なり、君疾くに予が著書を愛讀したまひて大安慰に住したまふ、又三池監獄二課長高谷嘉太郎氏來り訪はる、氏巢鴨在勤の時常に講話をきゝたまひ、一昨年一月試筆の時予觀世音讃を書して講話せし時、氏の請に任せて之を贈りしが氏今に之を珍藏したまひ、大に同地に法を喜びたまふ人の緣となりしといふ、本尊聖敎は如來の流通物なりといふ金言の如し

手前は靑年會場に於て會員の爲に第二回の信仰談話會を爲す、如來慈光の春風座にある心地す、和氣藹々として室に滿つ、午後師範學校々友會の希望に從て一場の講話を爲す、

夜縣會議事堂に於て自然法爾章第三回の講話を爲す、凡そ二時間半靈感溢れ神力臻る、說くもの聽くもの大に滿足す皆佛力より來らざるはなし、夜半野田君白川洞の諸君を始として有志諸氏の熱き見送を受け高谷君大內君と同乘して熊本を辭す、驛々に漸次兩君と分れて今や孤影寂然として玻窓の下に眠る。

○二十六日

烏栖に乘り換へしが、この日九州鐵道の端艇競漕の當日なれば長崎撰手連の今日一日と滊車中にての大騷ぎ小供らしくて罪なし門司につきて第一の渡舟にて下關より泉道雄君及び下關靑年會の有志者來り迎へらる、これより先き泉君一旦久留米まで予を追ひ來りて同地靑年會の爲に講話すべきを求めらる時恰も出立後たりし、其後電報にて交涉の末、本日滊車連絡二時間の隙を以て講話すべきを約せり、これ夜半に熊本を

出立せし所以なり、

泉君の寺は眼前に馬關海峽を一望に見下し、海風面を拂ふて壯快言はん方なし、況んや清爽なる朝、親友の家庭、敬虔なる信者は佛前に集ひて待受けらる、一時間餘、深く如來の大悲を仰く、下關商學校教頭及ひ教授松澤鼎成君來り迎へ且つ送らる、君は前年予に贈るに親鸞聖人八房梅材を以て製するの念珠を以てせらる、常に予か袖に在り、諸氏の懇切を感謝して山陽列車に上る。

晩、岡山に着す、池山君、丸山君、越智君等迎へらる、十日已前に過ぎし所、再び來る、高等學校及醫學校有志者より成る岡山佛教青年會の望に應じて、此夜、信仰談話會を開かんが爲なり、池山君の宅に開く、人家に滿つ予が實驗談、諸氏の質疑あり、內藤馬造君亦來り列らる、池山君の家庭團欒の中に溫き一夜を送り、よもやまの話をなす、君と相携へて、歐山米水を跋涉せしも、今や六年の已前となりにき、されど慈光常に世に滿ちたまひて、互につきせぬ御緣こそ嬉しけれ、

○二十七日

池山君に送られて岡山を出立し、神戸に着す、二日間、神戸佛教青年會に於て講話をなさん爲なり、善照寺に迎へらる午後講話を爲し、夜信仰談話會を爲す、熱心なる求道の諸君多く、殊に新聞記者若くは醫師、實業家等社會實際に立ち働けるの人がいかにも眞摯に、求めたまふ有樣、他に類少し、人數多からずと雖將來必ず大に信樂開發の時あらん、

○二十八日

朝再び信仰談話會を開く、前晩島地雷夢君を萬歲園に訪ふ、君痾を養ふて此花園に在り、不在なり、今朝來り訪はる、君か健康を見て喜限なし、午後湊川支部に於て講話を開き人生問題を說く、聽者眞面目の氣眉宇の間に迫る島地君も來り、大坂より蜂屋君來る、晩餐して京都に着す、阿刀田君を訪ふ、

○二十九日

朝稻葉師を訪ひ、午前阿刀田君、無漏田君等京都求道會の人々と共に深草に遊び玉日君廟を訪ふ、黑田最勝君の志を追懷せんが爲なりき、君は此所に深草求道會を起すの志ありし也、又元政上人の草庵に詣づ、歸りて新法臺に拜謁し奉る、恰も能淨院、淨曉院兩殿來り見えらる、淸話時あり、

午後眞宗京都中學に於て講話す、予が京都教校に學べるの時三帖和讃を學びたるは今日信仰に志すに及びて大なる助緣となれることを叙して、決して宗乘を疎かにすべからざるを說く、歸路時代展覽會に入りて御物阿佐太子筆聖德太子御像を拜見し奉る、光榮何ぞ之に加へむ、洵に一代記憶すべき靈像也、

夜、京都求道會の主催によりて淳風會館に講話を開く、自然法爾章につきて述ぶ、實驗談よりも人の視聽を惹くこと或は鮮かりしならむも、予としては親鸞聖人最後の遺訓として渴仰措かざる所、之を講ずる每に自然德風徐起微動其風調和の感なくんばあらず、

嘗て學舍に來り、道を求めたまひし杉崎君來られ、又求道會に來聽したまひし吉田君來られ、信の下に集ること眞に衆水の海に入りて一味なるが如し、

○三十日

京都を辭して江州八幡驛に下る、母上停車場に待ちたまふ、又牧田孫右衛門氏其手次の住職と共に待受けらる、乃ち母上と同道して住蓮安樂の墓に詣づ、牧田氏室を淸め、衾を新たにして待受けらる、松本雪城君八幡商業學校內に講話を開かんとて同車して來らる、校長大に喜び一場の講話を爲し、信念を以て商業を營み、大局を達觀して、同胞の小競爭に陷るべからざるを說く、江州は予か鄕里、人情自から理解し安きものあり、皆大に喜ぶ、

寺につきて二席の講話を爲す、これ今回立寄れる所詮なり住蓮安樂の昔を回憶して其恩を感謝す、殊に予は母上に從ひて終日往來し、殊に田舍のことゝて二人相乘の人車に乘りしは鬚男小供になつたつもりで殊に面白かりき、母と共に同車して出發し、母上は米原より村に向ひたまふ、兒謹みて別を告げ、獨り東に向ひ、名古屋に泊す、

○三十一日

正午金谷驛に着す、東遠佛教會の釋尊降誕會に望まんが爲也、兒玉祖虔、田中靈鑑の兩君熱心に盡力せらる、晝夜二回信仰を說き有志諸氏に送られて夜半出立す六月一日早朝新橋停車場に着す、學舍諸君來り迎はる、乃ち手を連ねて歸舍し、一同佛前に詣で朝の禮拜を爲す、此謹みて四十日間北陸四國九州中國東海所々に於ける傳道を與へたまひ亦廣大の冥護を垂れたまひし佛恩を感謝し奉る南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

六月一日は求道學舍紀念日にして本年は正に第五回に當る、當日の模樣已下及び若松求道會、佛教青年聯合會の概況等は次號に讓る

暑中傳道日割

七月十四日十五日　横須賀求道會
十六日ヨリ二十日マデ　關西佛教青年會
廿一日ヨリ廿五日マデ　廣島佛教講習會
廿六日　播州後藤師墓參
廿七日廿八日　神戸佛教青年會
廿九日ヨリ卅一日マデ　江州歸鄕墓參
八月二日ヨリ五日マデ　越中井波佛教講習會
八日ヨリ十一日マデ　飛彈高山佛教講習會
十五日ヨリ廿二日マデ　信州北部修養會
廿三日廿四日　同飯山修養會
廿六日ヨリ　越後水原青年會及
九月一日マデ　同教育講習會
二日ヨリ八日マデ　同長岡佛教講習會
九日ヨリ十三日マデ　同柳橋吉田柏崎等
十五日　求道學舍講話

求道學舍日曜講話題

二尊之大悲　六月二日
廻向の願行　同　九日
善巧方便　同十六日
佛日普照　同廿三日
常照是人　七月一日

自然法爾法語　同　九日
憶念　同十四日

第二求道會土曜講話題

審驗宣忠の信　六月一日
不請之友　同　八日
無限之大悲　同十五日
大悲無倦　同廿二日
不斷光　同三十日
善巧　七月十三日

第三求道會講話題

希望　六月二日
自然法爾　七月二日

本月十四日以來近角事地方傳道に出立致し候爲め本號は編輯甚だ整はず何分にも御諒察願上候也

求道會館設立喜捨金

受領報告（第廿壹回）

一金壹百圓也　東京　秦　敏之殿
一金壹圓也　札幌　吉田平次郎殿
一金壹圓也　在米　清川得璹殿
一金五圓也　東京　小森秀知殿
一金貳圓也　東京　丸茂むね子殿

小計　金壹百九圓也

通計貳千四百四拾七圓參拾八錢也

右御寄附を忝ふし難有奉存候茲に謹みて奉感謝候也

浩々洞出版部

眞宗大學教授　齋藤唯信師著

信仰と修養

實業をやるにも教育界にたつにも政治界に立にも、信仰と修養とかなければならぬ。本書は著者多年佛教研究の間に蘊蓄したる信仰と修養との經驗を吐露したる良書である。

好評再版　全一冊　假裝美本　金廿五錢　郵稅四錢

文學博士　南條文雄先生著

歎異鈔講話

歎異鈔は親鸞聖人の他力信仰の書也と云はんより親鸞聖人其人と云ふ方が適當である所謂我聖人の心のうちに絕對他力の大精神の凝り固まつたのが本鈔である本講話は博士が心血をそゝいで何人にも分るように其深意を發揮せられたるものである。

全洋裝堅牢箱入美本總ふりかな並製八拾錢　小包料八錢　一冊

清澤滿之先生著　我信念　金五錢　郵稅二錢

佐々木月樵著　光明の親　金三錢　郵稅二錢

多田鼎著　大聖釋尊　金八錢　郵稅二錢

多田鼎著　光明の人　金三錢　郵稅二錢

多田鼎著　光明の生活　金三錢　郵稅二錢

發行書目

精神界記者　曉烏敏著

求道錄

斷乎たれ、勇猛たれ、成功しても失敗しても男らしくあれ『求道錄』一卷は力の福音なり、望の引接なり。釋尊と「キリスト」と「ソクラテス」と親鸞と、「トルストイ」とは本書に躍如して現今の青年に大道を示導せむ。

全好評再版美本　假裝參拾四錢　郵稅金一錢

眞宗大學圖書掛編

空文藏書目錄

藏書は必ず目錄を調製し置かざれば散逸し易く、また所要の時さがすにも不便なるもの也。從ふて、目錄の調製は、常に藏書家の苦心する所なりき。本目錄は著者が多年眞宗大學圖書館にありて得たる智識と經驗とによりて編製したるもの也。各自圖書の多少に順して頁數の增減をも自由ならしめ　また卷末に記入番をも附しあれば、藏書家には至極便利にしてなくてならぬもの也。

定價四十錢　郵稅八錢

多田鼎著　正信偈講話

七月廿日發賣　金一圓五十錢　小包料八錢

浩々洞出版部　東京小石川白山前　振替口座二一二二

宗教界唯一の日刊新聞

中外日報

毎號六頁

紙代、郵送費共（一ケ月 三十二錢 半ケ年 一圓九十錢 一ケ年 三圓六十錢）

創業第十一年に入り、既に二千號（九月二十二日）を發行す

教界に於ける當代知名の文士論客は擧げて我紙上に筆を揮ひ光彩常に陸離として蘭菊美を競ふの偉觀を呈す。

京都 下京區妙法院前側町四二八 中外日報社

（特電九八九番）

新佛教夏期講習會開設廣告

一會場　本郷壹岐殿坂上宮學院

一會期　九月一日より同十日まで（毎日午前八時より同十一時まで）

一學科及講師

宗教學大意　佛教大意　融

基督教大意　加藤道

新佛教大意　廣井辰太郎

科外講義　境野黃洋　佛耶兩教界諸名士　玄哲堂

一講習料　七拾錢、但新佛教徒同志會會友は金五拾錢、會員は無料、臨時聽講料一回金拾錢申込と同時に納付の事

一申込期限　八月三十日まで

一申込所　小石川原町六番地　鷄聲堂（振替貯金口座番號一三五三）

明治四十年七月十日發表　新佛教徒同志會

【注意】講習料の納付は必ずしも現金なることを要せず郵券代用（一割增）可なり爲替可なり振替貯金（この場合には金二錢增の事）可なり

無盡燈

第拾二卷 第七號要目（七月發行）

華嚴の緣起性起を論す……河野法雲

▲詩謾會吟……諸同人

梵文妙法華經和譯……南條文雄

▲宗教家の態度……旭川

俳諧寺一茶……猪飼夜濤

▲答ふるの書……樋口惠勝

我は賣るものに非ず買ふ者也……多田鼎

▲感興……諸同人

現代の思潮に逆行せよ……本誌記者

▲朝永先生を送る……鳳溪

明惠上人の華嚴敎……和田龍造

▲先德餘香……南條文雄

經錄を閱して再ひ三經を拾ふ……加藤智學

定價一部拾錢　半年五十五錢　一ケ年壹圓　郵稅不要

南條博士監修 ●親鸞聖人全書 特郵價稅七八十錢

村上博士監修 法藏館編纂 ●佛教百科寶典 定價金壹圓二十錢 特價金壹圓

●●●精撰せる材料の博覽會場なり●●●

新案說教大家 田淵靜緣師立案

輕便新裝豫方

佛教各宗 布教大資本 製本

堅四寸四分 巾二寸三分 全文五號活字振假名付 總布クロース表金文字入 堅牢洋綴美裝千二百頁內外

●定價金壹圓貳拾錢 郵稅拾錢

●豫約價金九拾錢 郵稅拾錢

豫約期限七月中●期限經過後は定價に復す●前金に非されは豫約と見做さず●製本九月中旬より着金順により送本

▲▲讃題逸話傳記警訓 佛教各宗の金言教訓を提唱して明快に說破せり 各宗高僧名士の面影を偲ばしめ以て敎養ん鑽仰せしむ 日本佛教五十師の德望を敬慕せしむ 寸鐵人を殺す的の警訓 迷夢を警醒せしむ

▲▲談叢和歌家庭 嚴新なる事實的教訓を萬人に因果應報の道理を明なす 無常信念等の十數門に一通三唱すへき和歌、詠歌 婦人に關する言行、及烈女の言行は家庭の明星也

▲▲比喩笑林諺解 已所顯にて未所顯を現し 法城に入る門戸を開く 抱腹絕倒の中に偉大なる教訓を與ふること妙なり 人口に膾炙せる俚諺を解釋し 精神修養の敎師とす

時世適切の眼識を以て博く古今の珍材妙資料を普く網羅し 通佛教の演說教誨の爲に亘りて 富なる大林に無限豊後援となり又常に長參謀となりて新進布敎家に必ず敎壇の捷利者たらしむる 之に入らば必ず演說者の口舌に百花爛熳たらむ 鬱々たるは本書也

●活潑なる演說家の彈藥庫なり●●●●

田淵靜緣師立案 ●布敎資料全集 再版 定價金壹圓

豫約申込所 京都市東六條 電話座二二二五番 電口二二二八番 法藏館

南條博士監修 ●蓮如上人全書 特郵價稅八十錢

本書は愈七月十日發行す

近角常觀著（第九版出來） 信仰之餘瀝 定價拾五錢 郵稅貳錢

近角常觀著（再版準備中） 人生と信仰 定價貳拾錢 郵稅壹錢

近角常觀校訂（再版出來） 冠頭 歎異鈔 一冊郵稅共七錢（定價五錢郵稅二錢） 但三冊までは郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

近角常觀著（第三版） 懺悔錄 定價貳拾錢 郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區春木町二丁目二十一番地 森江分店

賣捌所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所

規定

一、本誌は毎月一回發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事 但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治四十年七月二十一日印刷
明治四十年七月二十五日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所 求道發行所

東京市神田區神保町
大賣捌所 東京堂

前號要目

求道

◎忠愛至孝之情

◎如來の本願

感謝

◎惟佛是眞◎吉崎回想◎那谷觀音◎事蛇蝎に同じ◎七里恒順師◎他力尊ふとや蚊屋の中◎無意識の冥合◎自然法爾◎生育我身大悲母西方教主彌陀尊◎不請而來無問而吐◎住蓮房の墓◎堀之內金谷

講話

◎到彼岸　近角常觀

告白

◎巨萬の富よりも嬉しい　津田常沒

講義

◎歎異鈔—第三章(續)　近角常觀

吟詠

◎遊魂綠想《短歌》　左千夫

◎短篇四章《長詩》　甲之

◎たとへ歌《長詩》　蕨眞

◎登嶽詠草《短歌》　志都兒

紹介

◎生死問題◎歎異鈔講義◎小供こゝろ◎丁未課筆

時報

◎傳道日記

感想

◎現時青年の信仰問題　近角常觀

◎同情の源　近角常觀

求道第四卷第四號　明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認可　明治四十年七月廿五日發行(毎月一回發行)